平成 28 年度文部科学省「日本/ユネスコパートナーシップ事業」

「ＥＳＤ・ユネスコスクール研修会　岡山 2016　報告書」

目　次

１．実施報告 …… 1

２．実施記録 ……11

（１）開会式 ……11

（２）実践発表……15

①「授業という枠を超えて、学校全体を『まるごと ESD』にするための１歩を踏み出す

～イギリスのサスティナブル・スクール調査から捉えた ESD エッセンス～」

横浜市立永田台小学校　校長　住田昌治……15

②「教科間のつながりを重視したＥＳＤ実践」

金沢大学附属中学校　教諭　戸水吉信……23

③「ACT*I* における ESD の実践～ハワイ姉妹校とのペンパルアクティビティを通して～」

広島県立広島井口高等学校　教諭　永尾和子……30

（３）ワークショップ

「ESD を学校現場で持続発展させるために―『2 学期からできる！』アイデア集づくり」

【小学校分科会】 ……38

【中学校分科会】 ……51

【高校分科会】……61

３．付録

プレゼンテーション資料

ワークショップ成果物　「２学期からできる！」ESD のアイデア集

１．実施報告

①プログラム

平成 28 年度　日本/ユネスコパートナーシップ事業

ESD・ユネスコスクール研修会　岡山 2016

主催：文部科学省、岡山大学

共催：岡山市教育委員会

後援：岡山県教育委員会、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク

テーマ：「学校で ESD を持続発展させるために」

日　時：2016 年 8 月 19 日（金）　13：00～16：00

場　所：岡山大学　一般教養 D 棟

プログラム：

13：00～13：10　開会式

13：10～14：25　実践報告

①「授業という枠を超えて、学校全体を『まるごと ESD』にするための 1 歩を踏み出す」

～イギリスのサスティナブル・スクール調査から捉えた ESD エッセンス～

横浜市立永田台小学校　　住田昌治　校長

②「教科間のつながりを重視した ESD 実践」

金沢大学附属中学校　　戸水吉信　教諭

③「ACT*I* における ESD の実践」

～ハワイ姉妹校とのペンパルアクティビティを通して～

広島県立広島井口高等学校　永尾和子　教諭

14：35～16：00　ワークショップ

「ESD を学校現場で持続発展させるために―『2 学期からできる！』アイデア集づくり」

16:00　　分科会ごとに解散

②参加者数

７５名

内訳：岡山県内５９名、岡山県外１６名（広島県、島根県、愛媛県、高知県等）

学校関係者６２名、教育委員会関係者６名、その他７名（大学・自治体職員等）

③実施概要

我が国の学校現場において ESD の実践はさまざまな形で展開されている。ESD は世界的な持続可能性の課題を見据えながら、それぞれの地域や現場、学習者の状況に応じた取り組みを持続させ、発展させていくことが求められている。そこで、本研修会は、学校現場において ESD をいかに持続させ、発展させていくことができるのかについて、ともに考えることを目的とした。

研修会では、プログラムにしたがって、開会式、実践報告、ワークショップ（小学校分科会、中学校分科会、高校分会の３分科会）を実施した。

実践報告では、全国から先進的な取り組みを実施している３校を選定してご報告いただいた。報告校は、学校全体で取り組む ESD を積極的に進めている、2015 年第 6 回 ESD 大賞受賞校である横浜市立永田台小学校、国立教育政策研究所の研究指定事業で教科間の繋がりを目指した ESD カリキュラム開発に取り組んでいる金沢大学附属中学校、総合的な学習の時間と教科、国際交流をつなげる ESD 実践に取り組んでおり、第１回広島県ユネスコ ESD 大賞ユネスコ大賞受賞校である広島県立広島井口高校の３校である。

横浜市立永田台小学校の住田先生からは、ホールスクール・アプローチによる ESD 実践状況について詳細な報告を得た。その中で、ケアリングの理念で教室と職員室を変えるという取り組みや、ESD と身近なことを繋げる、授業と生活を繋げる、学校と生活を繋げる、総合と教科をつなげるといった ESD を持続させ、発展させるためのアイデアが紹介された。

金沢大学附属中学校の戸水先生からは、ESD の視点に立った学習指導の目標を立て、教科の繋がりを意識したカリキュラムづくりの取り組みについて報告を得た。その中で、実現したことだけを書くカリキュラムマップ、実践事例集の蓄積・改善の取り組みなど ESD を発展させるためのアイデアが紹介された。

広島県立広島井口高校の永尾先生からは、姉妹校等の交流活動を核とした総合的な学習の時間を活用した ESD 実践についての報告を得た。その中で ESD の目標の明確化、系統的な年間計画、具体的プログラムの重要性と、誰にでも分かるプランと誰にでもできるシステムの必要性など ESD を持続させるためのアイデアが紹介された。

ワークショップでは、小学校、中学校、高校の 3 分科会に分かれ、自らの学校における

ESD 実践の課題を抽出し、話し合いを行った。更にそれらのポイントを全体で整理した上で、小グループでさらにその重要性や困難、解決策について協議しながら学校現場において ESD を持続発展させていくアイデアを１つずつ紙にまとめ、分科会で共有した。

④参加者アンケートの結果

（事前アンケート）

【参加理由】（複数回答）

ESD 担当者であるから	74%
ESD に関心があったから	16%
カリキュラム作りに関心があるから	9%
他校の実践を知りたいから	25%

【ESD の実践経験】（複数回答）

研修会で学んだことがある	77%
カリキュラム作成に携わったことがある	18%
ＥＳＤの視点での授業づくりを実施したことがある	21%
学校間交流含むＥＳＤ実践を実施したことがある	14%
学校外と連携したＥＳＤプログラム作りを実施したことがある	21%

【学校全体での ESD の実践】

実践したことがある	26%
実践したことがない	74%

（事後アンケート）

【研修会による ESD 実践に対する意識が変化したか？】

はい	91%
いいえ	4%
（未回答	5%）

【研修会による ESD 実践のためのヒントが得られたと思うか？】

とても思う	62%
少し思う	28%
どちらとも言えない	5%
あまり思わない	0%
全く思わない	0%
（未回答	5%）

【自由記述】

①ESD 実践に対する意識の変化の具体的な内容について

・教員同士の連携が大切。

・マンネリ化しつつあるので　共有したり　見直したりしなければいけないと再確認しました。

・学校や地域のよさを見直し、それを無理なく楽しく続けることが大切だということを改めて感じました

・社会の変容を起こすのが ESD

・１つの単元・パッケージのされた教材・題材の実践ではなく、「変容」のために学校全体としての取組がはっきりしていればよいのではないかと感じました

・まずは教員の意識をかえること。職場の雰囲気、教員間のコミュニケーションなどに目を向け、行動を起こすことがとても新しい発見、気付きとなった。

・少しの変化、楽しく活動することでも ESD の１つになるのだと感じた

・先生が元気であり、ESD を進めることが児童の学ぶ意欲が高まり楽しく学校生活を送れる（主体的）こと

・持続性をもたせるためには教員がもっとつながり、みんなで考えていくことが大切。そうした中心になっていかないとと思った。

・これまでの理解が一層進んだ。具体的な道筋が見えて来たように思う。

・どうしても総合的な学習を中心に考えてしまいがちだが、間違いであることに気付いた。

・持続可能性とは何かを考えさせられた。

・ESD の理念はよく分かった

・教師・学校の持続を目指すところがスタートであること

・子どもの変容について、見守ることができるように実践を進めていきたいと思います。
・子どもの変容が大切
・1 つの授業だけでなく、学校全体で ESD を考えていくことが大切
・教員間の壁のことや ESD の本質
・我々の意識の変化が大切である点
・ESD は「価値の変容を生む」ということがよく分かりました。教科⇒地域までもみじアプローチの広がりがとても分かりやすかったです。
・教科ではなく「意識」だと改めて捉えることが出来た
・ホールスクールアプローチで枠にはまった考えを変えても良いというヒントがもらえたこと。PTA 総会や通知表の件など。
・ESD では活動をしなければという考えがありましたが、価値の変容というキーワードを大切に、これから見直していきたいと思った。
・ESD について、よりどんなものかがはっきりしてきた
・職員室の先生が変容していくことが大切だということ
・ESD の意味するところ、捉え方の深さについて
・「つながり」を大切にすることが ESD のポイント!!無理強いをしない
・ハードルの高さばかりを気にしがちだが、生徒の変容をめざして実践を積み重ねることこそが ESD であると感じました
・学校全体で ESD の視点で教育計画を立てている学校があるということ。自校でも出来るという発見。カリキュラムマネジメントを ESD の視点から行うことができる。やりきれば楽しいということ
・教員の負担感を減らすこと楽しく行うことの大切さ
・教科とリンクさせたいと思った。
・自分の ESD に対する常識を変える必要があること
・「ESD」という難しいものを分かりやすく、分かりやすくなったものへの興味付けしていく過程を学ぶことができた
・ESD を考えたいと思います。楽にすることなのか！と思いました。
・教科指導の見方が変わりました
・ESD の視点の大切さが改めてわかった。考えの幅が広がった。
・ホールスクールアプローチは実際、管理職や教員間の考えに左右されると思いま

す。学校内では現状維持が精一杯というかんじで発展していないと思っています。他校の実践報告を聞いて総合学習のみでなく、教科に取り入れていくこともできるという発見をさせていただきました。

・負担に感じないこと、楽しく行うことが大切だと感じました。

・様々な学校の実践事例が聞けて有意義であった

・やはり多くの教員にとってはESDへのアレルギーというか理解不足がある？？

・他教科とのつながり、ユニットにとても興味がわいた

・今年転勤後はじめて出会った言葉ですが、いくらかのイメージがつかめました

・今までは、「主体的に学ぶ」「協働」という視点くらいしかなかったが、「新しいものを生み出す」「行動」という視点を得た。

・学校での取り組みの持続性のとても興味をもつようになりました。

②ESDの実践に向けて、新たに得たヒントについて

・教職員が意欲をもって取り組むこと。みんなが疲れないようにする。

・ホールスクールアプローチについてとても参考になりました

・教室や地域等、子どもだけに目を向けて実践してきましｈたが、その子どもを指導する教員、職員室に目を向けることが目からウロコでした。　学校で学んだこと・をライフスタイルに活かして（子どもも先生も）どこを切ってもESD!!

・ホールスクールアプローチを生かしたいです

・価値・行動・ライフスタイルの変容尾をめざしたホールスクールプロジェクトは学校という組織をとらえるのに新しい視点が得られました。学校運営もESDだと初めて知りました。

・教科間のつながりを共有する（しかも気軽に、みんなが目に見えるように）ことで、１～６年生まで学校全体でとりくむことができる。

・学校のよさをのばすという考え方、教職員が元気であることが大切という考え方学校はふやすのは得意だが減らすのは苦手

・本学校の取組、カリキュラムをもう一度見直していくことが大切だと思ったが、その前に教員みんなで学校を見つめ直していくことが大切だと思った。

・ホールスクールアプローチの考え方。これもやっていることではあるがESDの土台にあるのだと確認できた。

・ESDカレンダー

・行動価値観ライフプランを変えることが ESD にとても大事であること。
・永田台小学校の住田校長先生の話を聞いて、今までやっているから何となくするのではなく、持続可能な社会にするために阻害するものはきっていくということも必要だと感じました。
・ESD は活動すればよいというものでなく、子どもや学校の変容が大切であるということがよく分かった。ESD の本質的理解と変容について考えるよい機会となった。いろいろな教科と合同的に行えるところ
・小学校部に参加させて頂きました。本当に勉強になりました。
・いらない負担をなくし、子ども達に必要な、力になることに時間を使えるようになったらいいなと思います。その取捨選択がむずかしく、1 人ではできないですが。
・様々な方法によって ESD にアプローチできる
・教員の負担感が大きいので、負担感を減らしながら子どもの変容を楽しみに活動することができるよう実践していくことが大切だと思いました。
・環境・福祉などの分野にとらわれすぎず、子ども達の感性を信じ、進めることが大切
・疲労感を取り除くために、校長采配で通知表の所見をなくすとは…。素晴らしいです。これなら授業準備やノートチェックがもっとできます。
・研修会だからと参加したが、三校の実践事例を聞き、元気がもらえました。やってやろうという先生達の熱意を感じ、自分もこれからできることがあるのではないか、何かしてみようと思いました。
・30 分のワークショップ、研修のやり方・価値の変容、生活の変更、そして社会の変容まで求めるのが ESD　・総合との違いがはっきりした
・持続可能にするためには、楽しさ、負担感の軽減が大切・児童も教員も変容していくことが重要
・人の変容を目指しているところ
・まずは実践してみること。そして実践を記録に残していくことが大切だと感じました。
・教員どうしのつながりを持つこと
・総合＝ESD にしてしまうという考え
・まず、自分の教科の授業に ESD の視点を取り入れて実践したいと思います（2 学期から）

・ESD の視点の大切さが改めてわかった。考えの幅が広がった。視点を他の先生と共有する方法や 1 人で深く抱え込まないこと。

・教科間で ESD に対してつながりを持ったカリキュラム作成をし、実践していくことから他教科間とのつながりを大切にしたもの（Unit 作り）へ

・校内で ESD について、情報を発信していく。（押し付けでなく）

・教科間のつながりを意識した授業づくりが展開できることを知ることができた

・実践ありき、の思いを強くしました

・さまざまな実践をしている学校があることを知ることができました。

・他校の実践を知ることができた。ESD とは何かをしっかり他の教員に伝えることが大切。

・バイリンガルスピーチ、クロスアートはぜひ今年度中に実施したいと思います。そして、交渉の大切さ、色々あきらめずに楽しんで取り組んでいこうと思いました。

・他教科との連携について考えるようになりました

③ESD を持続発展させるために、今後、重点的に取り組みたい内容について

・環境学習の充実。

・全教員で学校課題についてとりくみたい

・ホールスクールアプローチに取り組んでいきたいと思います。

・現在あるカリキュラムの見直し

・学年間の交流を開始したい

・現在の計画を年度末にできたこと（よかったこと）とできなかったこと（検討を要すること）にきちんと分けて再構成したい。

・カリキュラムの見直しをしたいです。（きっと考え方、捉え方が縛られていた）

・めざす学校の姿、子どもの姿を全職員で共有していきたい。

・ESD とは何かをもう一度確認したい。学校のよさ、持続させたいことをみんなで出し合う。

・全職員でカリキュラムづくりをしたい

・今やっていることをデザインし直してカリキュラム作りにつなげたい。

・カリキュラムづくりを検討する。

・教職員が負担感が減り、やってみたい、ワクワクとなる学校 ESD

・ESD＝総合ではないという主張はしていこうと思う。

・デザイン化・見える化・教職員の関係（共通理解、情報共有、雰囲気作りなど）
・改めて、活動計画を見直したいと思います。
・全職員で全体計画 ESD カレンダーを見直したい
・ユネスコスクール申請　地元の大学との協働
・とにかく、自分の学年で取り組んでみたことを記録として残し、次につなげていきたいです。
・学校改革
・学年のつながりだけでなく、学校全体の縦のつながりが大切だと思いました。教員の共通理解を進めたいと思います。
・カリキュラム（計画）を無理なく作成していきたい
・子どもたちにまかせてみる、つぶやき、気付きを大切にした内容になるようにしたいと思います。
・まずは、教員全体で学校の良さに目を向けることから始めてみたい
・学校の良いところの見直しをして、それを持続可能なこととしてひきついでいきたいと思います。
・今日は市役所から来ました。学校現場でどのように ESD が取り入れられているのかよく理解できました。学校運営の SD 化という話が中心で大変興味深かったです。市としても状況は同じなので、取り入れていきたいと思います。
・全職員で、ESD カレンダーにかかわった教科の学習プログラムを 1 人 1 つ考えていく（まずは担当者が担当学年で実践を行う）
・ESD とは？という意識を下げるために、職員に今日の研修を知らせる。・教科同士がつながる授業を実践できる環境づくり（掲示など）
・教科同士がつながる授業を実践できる環境づくり（掲示など）
・小中学校で連携して、国際交流が地域を知る、愛する活動をしようと思う。
・イギリスの学校との交流を行いたい。（接点がなく、何を足掛かりとすればよいか分からなくて困っている。）
・海外の姉妹校との交流の見直し（学びになるように）
・ESD の視点を様々な場面で浸透させていきた。
・本校は地域、防災を結びつける ESD を考えているので、この実践について考えてみたい。
・授業の再検討

・ESD の視点を、生徒・先生・保護者に伝えるために ESD 通信を作ってみたいと思った。

・現在の取組を持続させることが第一ですが、その取り組みが実際にどう生きてくるのか活かされていくのかというフォローアップがとても必要であると感じました。

・ESD の視点をもって日常の教育活動を行っていくこと。

・ESD の視点を常に意識しながら、生徒も教員も楽しい授業づくりを工夫していきたい

・教科横断プログラムの完成、校内職員への ESD 啓発

・各学年代表からなる委員会をつくり、全学年でカリキュラムを検討したい。

・海外の何等かの機関との交流をしたい

⑤フォローアップの取り組み状況

ワークショップの成果を広く共有し、各学校で ESD 実践を進めていく上での参考としてもらうため、ワークショップ参加者から得られた学校現場において ESD を持続発展させていくためのアイデアを「2 学期からできる！ESD のアイデア集」としてパワーポイント形式に取りまとめ、岡山大学教育学研究科 ESD 協働推進室 HP に掲載した。平成 28 年 12 月 22 日現在での閲覧数は 79 件である。

また、岡山大学 ESD コーディネーターが、学校や教育委員会等からの ESD の進め方などに関する電話や電子メールによる相談に個別にきめ細かいサポートを実施した。

⑥研修会実施に関する自己評価

岡山県内・県外の学校関係者、教育関係者 75 名の参加を得て、学校現場において ESD をいかに持続させ、発展させていくことができるのかについて実質的な協議が実施できた。

本研修会に関する参加者の評価は、事後のアンケート結果で、91%の参加者が ESD 実践に対する意識が変化したと回答したこと、および、研修会による ESD 実践のためのヒントが得られたと思うかとの質問に、「とても思う」および「少し思う」の回答が計 89%であったことから、概ね好評だったと考える。

当日参加できなかった多くの学校関係者の ESD 実践に資するため、本研修会の成果を広く発信するとともに、詳細な記録を提供することが極めて有効と考える。

本研修会をより実りあるものにするために、ユネスコスクール支援大学間ネットワークを活用した、各学校のニーズに応じたサポートを継続的に実施していきたい。

２．実施記録

（１）開会式

○司会　川田　力（岡山大学大学院教育学研究科）

皆さま、本日は非常に暑い中、また夏季休業中で二学期の準備にお忙しくされている中、平成 28 年度「日本／ユネスコパートナーシップ事業」による岡山大学・文部科学省主催の ESD ユネスコスクール研修会岡山 2016 にお集まり頂き、大変ありがとうございます。本日は「学校で ESD を持続発展させるために」というテーマで、実践報告と分科会の二部構成でこの研修会を実施したいと思います。

開会にあたり、本学の副学長・理事である阿部宏史先生より一言ご挨拶を頂きたいと思います。

○阿部宏史（岡山大学副学長・理事）

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介頂きました岡山大学の理事・副学長を務めております阿部と申します。学内の ESD の推進を担当している関係で一言、ご挨拶を述べさせて頂きます。

本日は大変お忙しい中、暑い中、沢山の方にお集まり頂きまして、ありがとうございます。文部科学省の日本／ユネスコパートナーシップ事業による ESD ユネスコスクール研修会ということで、ここ数年、毎年の様に研修会を開催させて頂いています。ESD は 2005 年に国連の ESD の 10 年間の取組みとして始まり、2014 年に最終年で岡山そして愛知県名古屋市で総括の世界会議が開かれました。特に岡山大学ではユネスコスクール世界大会に向けて、ユネスコスクール全国大会を開催し、1,000 人以上の人にお集まり頂いたところです。岡山市にとっても初めての大規模な国際会議でありましたが、97 の国・地域から 3000 人の人が集まるという非常に大盛況のうちに終了することができました。その後、2015 年以降の枠組としてグローバル・アクション・プログラムというのが出され、５つの重点分野を設定した上で、世界中で ESD の取組が継続されているところです。

文部科学省は ESD の 10 年にあたりまして、ユネスコスクール…ユネスコではユネスコスクールではなく、ASPNet と呼んでいますが…それを ESD の拠点と位置付けて日本全国でユネスコスクールの認定増加に努めて参りました。2005 年には全国で 19 校しか無かったのですが、現在は 1,000 校近くになっています。急激にユネスコスクールが増えてきたということですが、一つ課題としては、ユネスコスクールの活動の質保証ということがあります。また一方で、数が増えてきたことによって非常に優れた取り組みも蓄積されてきたということもあります。

本日は横浜市立永田台小学校の住田校長先生、金沢大学附属中学校の戸水先生、広島県立広島井口高校の永尾先生のお三方にお越し頂いています。優れた取り組みについて実践報告をお願いする予定です。3 人の先生方には大変お忙しいところをお越し頂き、ありがとうございます。本日午後の 3 時間程のプログラムですが、色々と情報交換もして頂き、今後の ESD の推進のために学んで頂けると嬉しく思います。簡単ですが私からの挨拶は以上です。どうぞ宜しくお願いいたします。

○司会　川田　力（岡山大学大学院教育学研究科）

続きまして、本学大学院教育学研究科研究科長の髙塚教授より一言お願いいたします。

○髙塚成信（岡山大学大学院教育学研究科）

皆さんこんにちは。岡山大学大学院教育学研究科研究科長の髙塚と申します。理事からもう十分にお話し頂いておりますので、重なって非常に恐縮ですが、ご挨拶を一言させて頂きます。本日は大変お忙しい中、そして最も暑い時間帯に私どもの ESD ユネスコスクール研修会 2016 に多数ご参加頂き、誠にありがとうございます。本研修会は文部科学省の日本／ユネスコパートナーシップ事業の一環として、私どもの教育学研究科にあります ESD 協働推進室が岡山市教育委員会様との共催で岡山県教育委員会様そしてユネスコスクール支援大学間ネットワーク様のご後援のもとに開催させて頂くものです。岡山市教育委員会様には運営の面におきましても大変お世話になりましたことを、この場を借りて厚く御礼申し上げます。また皆様にはユネスコスクールとして、ESD の推進拠点となって実践に取り組まれておりますことを、心より敬意を表したいと思います。さて、ESD の 10 年を終えまして、ユネスコスクール加盟校の数では世界でトップになっている日本でありますが、課題といたしましては、ESD をどのように持続し、そして更に発展させていくのかということであろうかと思います。それを踏まえまして今年度はここにありますように、「学校で ESD を持続発展させるために」ということをテーマにさせて頂いています。海外におきましては無差別のテロが頻発し、そして国内におきましても凶悪な犯罪が多発し、自然災害も発生しておりまして、社会の持続発展を阻む多数の要因が存在する中でありまして、ESD は益々その重要性を増しており、ESD の実践推進拠点としてユネスコスクールにおかれましては学校教育を家庭教育・社会教育と結びつける上でも非常に重要な役割を果たしておられると認識しているところであります。

学校において ESD を推進するためには学校全体で取り組むことが非常に重要であります

が、やはり課題解決のためには学校独自での取り組みを考えるだけでなく、地域内、そして更には地域や国も超えて ESD の実践を共有し、相互に学び合うことが非常に重要だと思っております。本日先程もご紹介ありましたが、学校全体での取り組み、或いは教科指導の中での ESD の取組、また、姉妹校との協働学習を通じた国際的な ESD への取組により、その ESD の持続発展に向けて精力的に取り組まれております 3 つの学校の先生方に講師として遠路お越し頂き、実践報告をして頂きますこと大変ありがたく思っております。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。本研修会が ESD を推進しておられる皆様がたの学校における理論的な基盤を形成し、さらに素晴らしい ESD の実践が共有され、実践上のネットワークが形成され、更には新たなアイデアの創出の場として機能することによりまして、それぞれの学校における ESD が益々推進される一助となりますことを祈念いたしまして、私の方のご挨拶とさせて頂きます。本日は何卒宜しくお願いいたします。

○司会　川田　力（岡山大学大学院教育学研究科）

では引き続きまして、講師の先生方の紹介をさせて頂きます。本日実践発表を行って頂きます 3 名の先生のご紹介をさせて頂きます。まず始めに、横浜市立永田台小学校の住田昌治校長先生です。ご存知の方もおられるかと思いますが、住田先生の永田台小学校は 2015 年第 6 回 ESD 大賞も受賞された学校でありまして、学校全体での ESD に精力的に取り組まれている学校であります。続きまして、金沢大学附属中学校の戸水吉信先生です。金沢大学附属中学校は国立教育政策研究所の研究指定事業で、「ESD 教科間の繋がりを目指したカリキュラム開発」に熱心に取り組まれている学校です。引き続きまして、広島県立広島井口高校の永尾和子先生です。永尾先生の学校では総合的な学習の時間と教科国際交流をつなげるような ESD を実践しておられまして、第 1 回広島県ユネスコ ESD 大賞ユネスコ大賞を受賞された学校です。お三方の先生、宜しくお願いいたします。

引き続きまして、本日の進め方につきまして、説明させて頂きます。

お配りした封筒の中に資料等入っているかと存じますが、この後、実践報告を 3 名の先生方に頂いた後、10 分ほど休憩いたしまして学校種別ごとの分科会・ワークショップへと行って頂きます。第一希望のワークショップの方へご参加頂ければと思います。資料の中にポストイットが入ったものがあると思いますが、これについてご説明させて頂きます。これには、これからご報告を頂きますお三方の先生の話をお聞きになりながら、ピンクのポストイットの方には本日の実践報告でヒントになった点をまとめて頂ければと思います。

一枚のポストイットにつき、ひとつのアイデアを書いて頂ければと思います。複数あれば、何枚かお使い頂ければと思います。青のポストイットにつきましては、ご報告をお聞きになりながら気づかれたご自分の学校における課題を、同じ一枚のポストイットに一項目ずつメモをして頂ければと思います。最後に黄色のポストイットは、ご報告された先生方に聞いてみたいと思われた点について一枚に 1 点ずつまとめて頂ければと思います。これが分科会ワークショップの資料になりますので、是非ご協力を宜しくお願いいたします。

お願いがございます。要項の一番最後に書いてありますが、本日は記録用に写真と動画を撮影させて頂きます。そのうちの一部を報告書などに使用させて頂きたいと思いますので、ご了承頂ければと思います。万一不都合のある先生がいらっしゃいましたら、受付までお声掛け下さい。よろしくお願いいたします。

それでは早速、実践報告の方へ入らせて頂きます。最初は横浜市立永田台小学校の住田先生からご報告頂きます。住田先生、よろしくお願いいたします。

（２）実践発表

① 「授業という枠を超えて、学校全体を『まるごと ESD』にするための１歩を踏み出す
～イギリスのサスティナブル・スクール調査から捉えた ESD エッセンス～」

横浜市立永田台小学校　校長　住田昌治

みなさん、こんにちは。住田と申します。皆さん、ESD はもうやっていらっしゃってご存知だとは思いますが、“ホールスクールアプローチ”というのはいかがでしょうか。お聞きになられたことはありますでしょうか。先ほど出ました GAP の中では、機関包括型アプローチという言い方がなされていますが、学校についてはこれはホールスクールアプローチ。学校全体を丸ごと ESD にしていく。または、学校のどこを切っても ESD が見えるとか、持続可能性が見えるとか。そういったようなことで、教科などを超えて学校全体を持続可能にしていこうという営みなのです。

下にある絵は、「サステイナブルマップ」で、学校全体にどのような持続可能性が見られるかというようなことを 1 枚の絵に表したものです。今日は先程言われたテーマにもありましたように、「持続発展」ということを包括しながら話をしていきます。飛ばしていく箇所は後程の小学校部会で紹介させて頂きますので、どんどん進めていきます。

さて、今話題になっている「教員の多忙」。実は 8 月 16 日発売のこの『AERA』。ご覧になられた方はいらっしゃいますか。ここに書いてあるのは、教師の SOS。本業以外で忙殺。先生が忙し過ぎるとか。こんな中で ESD をやらなければならない。それで、どうすれば良いのかをここで考えなければならないのですが、私はここの 13 ページにこのようなことを、取材を受けて書いたのです。ESD というのに私たちは取り組んでいますが、多忙解消とこれがどう繋がりがあるのだろうか。先ほどお話ししたように、学校全体まるごと ESD ということは、学校が持続可能性を考えていくわけです。そうすると、多忙解消と ESD というのを考えていく時に、学校の持続可能性とか、地域の持続可能性とか、地球の持続可能性

って考えていくわけですが、そのおおもとにいる我々教員が持続可能かどうか、ということをもっと考えていかないと学校は持続可能にならない。ということは、結果的に、地域や地球の持続可能性なんて考えられる余裕はないということ。日々忙殺されているわけですから。そう考えると、上手く ESD を学校経営に使いながら、多忙解消も含めて、先生たちが健康で元気で日々の教育活動に取り組めること。これが一番大切な持続可能性のおおもとになるわけです。それ無くして、ただやらなければならないことに追われているだけでは ESD らしさというのはやはり出てこない。

それで、永田台小学校では、FACEBOOK で私と友達になっている人は見たことがあると思いますが、8 月 3 日から 16 日まで学校閉庁日にした。先生たちはとにかく休みました。休ませました。これを出したところ、私の経験したことのない「いいね！」が 321（笑）。シェアが 89 件なんですよ。これは驚きでした。多分、シェアした方のを誰かが見て、またシェアした、ということなのだと思いますが。これがどんどんどんどん拡散していって、お友達も増えたのですが。結局、非常に関心が高い、ということです。今の教育現場というのは非常に先生たちの働き方ということに注目していると。社会も、地域も、国全体も注目している、というわけです。となった時には、今、結構チャンスなんです。色々な面で。それで、持続するためにはどうすれば良いか。発展させるためにはどうすれば良いかな、ということを今日は考えてみたいと思います。

やはり持続させる為には、どうですか。楽しくなければいけないですよね。やらされているのでは面白くない。負担感がある。やりがいがあるとか、主体性があるとか、変容とか、こういうのがあるからやはり持続していこうということになる。発展となった時にはやっぱり新しいとか、イノベーションとか、囚われないこと。教員というのはどうしてもある意味囚われているので、そこからいかに脱却するか、とか、いかに抜け出すか。そういうことがある。で、そのためにはやっぱり「デザイン」です。方向付けや、リーダーシップがすごく大事になってくる。

もともと ESD というのは“再方向付け”という、今までやってきたことを見直して、より持続可能な方向に方向付けしていきましょうというもの。ということは、方向付けのところはどっちかと言えば、「計画」としていたのですが、やはりそうではなく、今は「デザイン」をする。今はきちっとデザインをし直して、方向を変えていくチャンスだ。それで、私の学校によく来られる方が、感想を言われるのですが、永田台へ来て、「元気な学校だ」とか、「面白い学校だ」とか、「不思議な学校」とか、「無農薬」、「あまり肥料をやっていない」とか、「寛容性が高い」、という風なことを言われて。「元気な・面白くて・不思議な」

を、ガラガラポンっとしたのが永田台小学校。どんなことかと言うと、学校全体の営みとして ESD だと。教科とか授業とか当然やっているのだけども、それだけではなくて、私は校長ですから、学校運営と学校経営に ESD を使っています。ですから、一貫して学校全体にサステナビリティ―が広がってくる。また、どこの学校でも出来ることがある。あの学校だから出来る、とか、あの学校しか出来ない、ということではなくて。そういうことをやりながら、児童が変容していっている。

で、結局 ESD って何なのかというと、価値とかライフスタイルとか行動の変容を求めているわけです。持続不可能な様相を呈しているそういう地域社会を持続可能な方向にするよう、子ども達が向かう。要するに、子ども達がそうなっていくということは、持続発展にはすごく影響していると思う。続けるというのは、校長が変わったらやらなくなったとか、メインの先生がいなくなったら出来なくなる、というのではダメなのです。中学校や高校で割と色々なことが継続していくというのは、子ども達が変容していっているからですね。子ども達がそういう校風を作るというふうになるわけですから、やはり子ども達が導いていくことが大事であると。そのためには色々とデザインをしていくんですよね。学校をデザインしていく。

指導案検討というと、うちの学校では「授業デザイン」と言って、1 回で一堂に会して皆でやるという形を取っています。PTA 総会です。PTA 総会では保護者と教員が一緒になって円卓を囲んで、そこで学校について色々とディスカッションするというような形をとる。よく PTA 総会っていっぱい議題があって、一方的に伝えて承認しました、で終わるというのが多いですが、やはりより「再方向付け」、先程も言いましたが、「デザイン」をする。そして学校をより良い方向へ向けるとか、持続可能な方向に向けるためには、どういう風に今の学校を良くしていこうか、ということが、やはり皆で考えるべきこと。という風に考えていくと、やはり PTA 総会も。学校の日常の様子をうつした写真ですが、これは職員会議です。とにかく身近な人で集まって、要するに対話をすること。というのはコミュニケーションを取ることです。それが重要ですので、何かこう、皆黙ってシーンとしているのではなくて、皆で意見を出しながら改革していこうと。ESD というのは参加型ですから、教員が自ら変わっていくということが大事。こういう風にして、皆で意見を出し合いながら、会議を進めていく。で、最終的にこういう風にしていきましょうという話になってくるわけです。子ども達の授業もこのようなワーク型と言うのか、グループワーク型の授業をしていく。これは形ですので。

ESD 実践校にはよく私も行くのですが、やはり共通していることがある。それは何かと

いうと、教師も子どもも排他的ではない。教師と生徒の壁の低さ。多様性、受容性、そして学習意欲が高い。というのがどの学校も、別にそろえている訳ではないのだけど、非常にこういう傾向がやっぱり強いだろうな、と。やはり学校として核となる考え方を持っています。永田台小学校は「ケア」、「ケアリング」を核としている。

多分、今まで聞いていて、「何だろうな。ESD なの、それ？」「ESD って何なのかなあ？」と、だんだんモヤモヤしてこられるのではないでしょうか。恐らく、うちの学校へ来られた方は皆そうなんです。ESD の授業を見せて下さいって言ってだいたい来られるんですよ。で、授業を見た時に、「これが ESD なんですか？」って言われて帰られるんですよ。うちの学校は何かって言うと、「学校全体を ESD にしていますんで。」という話をして。そうすると、何を感じて帰られるかっていうことが非常に大事になってきていますよね。そういうのが、ホールスクールアプローチ。学校全体が持続可能かどうか、要するに授業でやったことが学校生活や地域社会だとか家庭で実践して出来ているか、というところを見ていく。

この岡山大学でもありました、ユネスコスクール世界大会で採択された『岡山宣言』。ここで私がこれを書いたのですが、もっと私たちは ESD の本質を理解する。何かをやっている、この授業をやっていれば良いとか、環境教育をやっていれば良いとか、そういうものではなく、きちんと本質を理解しましょう。魅力は何かというと、「変容」ですから、変容型教育という要するに価値とか行動とか変容したかが大事。で、明確に示します、という岡山宣言というか、「コミットメント」をユネスコスクールで出しました。ですから、これは我々みんなでやっていかなければならないこと。それで、今言われたのが、“自分が変わることによって、他者が変わり、社会が変わる”という、そういう「変容の物語」が ESD にはある。だから実践をした時に、ただ実践をしたというのではなく、どんな変容があったか、ということをきちんと掲げていかないと、そんな魅力にはならない。

特に共有したいことはこういうことです。ESD は表面的な変化は見られても深い変化は見られなかったので、そこをこれからちゃんとやっていかなければいけないし、この変容というのは子どもの変容もあれば、教師の変容もあれば、学校地域の変容もあると思わねば、ということで、様々なレベルの変容が語られるでしょう。で、結局、世の中では先程もお話したように、持続不可能性と持続可能性がせめぎ合っているわけですから。そうすると、“持続可能な未来への変化の担い手を育てている”、という本質に我々は気づいていかなければならない。ただただ何かをやっていれば良い、というものでもない。今までずっと実践はされてきていんですが、それに向けてのアプローチが開発されていなかった。

これでホールスクールというのは大事ですよ、と。で、ESD らしさというのはこういう所にあるのではないでしょうかと。やはり変容していくこと。教師とプロジェクトの中だけでやっているのではなく、学校全体を持続可能にしていこうと。

それで、最後のところで計画へのデザイン。デザインというのは再方向付けで、今こそチャンスです。今、教育課程が変わろうとしているところですから、今こそシステムを変えるチャンスです。最初にお話しした、多忙とか、先生たちの働き方を含めてですよね。学校というものを変えていく。そういう日本の教育を変えていく原動力になるのが ESD だと言ってあるのですから、そのくらいの気持ちを持って進めてく。そのくらい自信を持ってやっていく、というのが ESD。

それで、ここではもみじアプローチということで、どんどん、じわじわともみじが色づくように学校全体が変わっていく。急激な変化ではないということを言って進めていくことです。それで、先程お話ししたデザインですね。四角のものを丸にして、そしてそれが更に未来の教育へと繋がっていく。例えば学校で研究会をやっていてもどうも形骸化している。それならば、それを、変化を起こすような研究会に変えていこう、というようなこととか。先ほども職員会議を見てもらいましたが、ああいうことも含め、職員室と教室のあり方も含めて、色んなことが学校のシステムを今から変えていくのが、ひとつ ESD の大きな役割を果たします。

これまではどちらかと言うと、左側の図の様な形で進められてきたのです。外側の〇よりも真ん中が大事だったのですが、外側の方へどうしても目が行ってしまったので、何かあれをやらなければいけないとか、あれをやっていれば良いとか、ということになっていたのですが、あれはもう当然やっていることです。殆どのところが。ではなくて、もっと日常生活に目を向けてみると、例えば教室でやっていること、先生が教室でやっていることが職員室では出来ていないとかね。先生自身がね。そこのところは、2 点の距離を縮めていった方が良いだろうと。（ESD フローラ）総合と教科にしても、能力・態度。生活、授業でやったことが生活に活かされているかどうかとか。そういう見方。何か言っていても、生活が全然違うということがあるじゃないですか？例えば昨日何名かの方と夜懇親会をしたんですよ。その時に、出た食べ物は全部食べましょうと。お酒も全部飲みましょうと。残さないようにしましょうと。これはね、自己変革です。実は。ということは、食べられる量しか頼まない方が良いということなのです。そんなこと何？と思われるかもしれませんが、それは常に ESD。本当は。要するに自分の生活をどんな風に変えるか。子ども達が給食を残す。これはどんな意味があるかと考えたい、と。子ども達が食べている給食の産

地はどこか、というのを考えること。授業の中で。そのことは非常に ESD 的ですよね。ということは、学習と生活というのは非常に密接な関係があって、その 2 点を上手くバランスよく縮めていくことがやはり ESD の肝になってくる。キーの部分ですよね。それをやっていこうということが、一つのデザインであると。

で、そうやっていくうちにどうなったかって言うと、子ども達は自信を持って語れるようになってきました。これはエコプロダクツ展と言って、毎年出ているのですが、ここで代表した人は、一対一でとにかく話をすると。発表しても誰も聞いてくれませんから、とにかく捕まえてキャッチ方式で話をすると。それで、資料とかは持たないで、自分のやっていることを誰かに伝えて、その人からフィードバックしてもらう。要するに、社会に対してどんなことを自分から発信をするのか、というような活動をしています。それで、自信を持って語れるようになる。また、今年からつながり祭というのを始めて、高齢化が進んでいる地域ですので、シャッターが全部下りているところを何とか開けて、赤ちゃんからお年寄りまでが集えるようなそういう会をしたいと。子ども達がそういう発案をして、町内や行政の人に働きかけながら、どんどんそういうのをプランニングしていきながら、こういうつながり祭という名前の祭りを行って、こうして地域を活性化していく。子ども達の活動を、また、子ども達の学校での活動の活性化が、地域の活性化。岡山ではそういうことは普通にあるのではないかと思いますが、でもやはり学校は地域の核です。学校の子ども達が地域の担い手だという意識を持つことが大事です。

あとは認知症の問題ですね。認知症の問題は非常に大きい問題ですよね。認知症キッズサポーター講座というのをご存知かどうか分かりませんが、みんなでやっています。5 年になると、地域に出て行ってそういう研究をしたり、地域の見回り活動に関わって、地域の課題を学校で引き受けながら、一緒に課題解決に向かっていく。認知症を何とかすることは出来ないわけで、認知症をサポートする人達が沢山必要です。見守る人が沢山いる、ということを子ども達は学んで、地域はそうやってお互いに協力し合って助け合っているということを学ぶことによって、自分の親が困っているときに「いや、こういう人がいるんですよ。」ということを教えています。

あと、生ごみの問題。ごみの問題。これも地域の問題として子ども達が取り上げて、そのワースト 1 から脱出するという。

あとは、これもよく話題に上って、要するに世界遺産にするためにやったのかと言われるのですが、全然そんなことはなくて、結果的に世界遺産にしたいと思った鎌倉市役所の方々の想いと、市民の想いは全然違うということに子ども達は気付いた。そんなことでは

なくて、ボランティアをしている人が沢山いた。この人達は世界遺産にするためにやっているのではなくて、鎌倉が好きだから守りたいからやっていると。こういう人達に触れて、何が大切かということ、その「価値」ですね。それを子ども達が実感して、「じゃあ、友達と一緒に行こうよ」と。「クラスで行こう」とか、「学年で行こう」とか言って、一緒に森に行ってみたり、また地域に戻って地域の活動に関わってみたりとか、という風になっていったのです。そういった変容が見られることが大事だと思います。社会科の学習からとか、総合の学習から発展していくわけです。世界遺産に登録したいからというのではなく、最終的に何が大事なのかということに気が付く。結果的に自分の地域にそういう人達がいて、地域を愛するとか、地域を一生懸命守っている人達がいて、自分たちはその中で生きていると。これから先、この地域のためにどんなことが出来るか。というのをここで考えるようになっている、ということが分かりました。

これからホールスクール・アプローチを進めていくにあたって、まず現状の把握が当然必要です。それから、ヴィジョン。どんな問題があるのだろうか。社会とか環境とか。先ほど申しました「教師の多忙感」というのは本当に大きな問題なんですよ。多忙感と共に、教師の睡眠時間が何時間あるのか。結局、子ども達の前に元気で立てるかどうかということは、教師の使命ですよね。授業があってしなければならない。そのためには、色んな課題とか問題があるのを、どのようにみんなで解決していこうか。そのためにはどんな教育活動がいるかな。ということですよね。で、私は土台としてこういうことをいつも言っています。とにかく、学校ではやりたいことをやれるという自由があるのかどうか。望まない争いごとに巻き込まれないことが出来るかどうか。今日より明日とか、今年より来年が良くなると思えるかどうか。そして、何よりも排他的ではないこと。要するにウェルカムな状態をいつも作っている。「来る」、と言った時に、「いや、ダメです」、と言わない。というのが、ESD の場合恐らく大事な視点なんだろうな、という風に思います。

これは私がいつも言っていることですが、ユネスコが言っていることでもあります。まず持続可能な社会の担い手となるために、エンパワメントが大切だと言われている。要するに「元気づけること」です。確かに難しいことはありますよね。ESD の研修会をすると、横文字が多くて困るとか、やっぱりよく分からないって言われるんですけれども、でも何においても、先程、一番最初にお伝えしたように、また持続発展させるためにも ESD やっている人が元気だとか、ESD をやっている学校は元気だとか、何かこうワクワクするとか、授業が。こういうことはすごく大事なことですよね。精神的なことになりますけど。でもそういう意識レベルでの変容が ESD ではすごく大事なわけですから。意識を変革すること

が一番難しいわけです。これが一番ですね。あとは、皆さんもう十分にされていることだと思うんですね。学習内容とか学習環境とか、学習評価とか社会変革。この様なことも当然、大事です。あと、私がいつも言っているのは「気に掛ける―caring」です。学校においても大人の、職員室の雰囲気がそのまま教室の雰囲気になるわけですから、職員室を良くすれば教室が良くなるわけですよね。そうすると、職員室の中での同僚生活というか、隣の人とのそういう対話、コミュニケーションがどのくらいあるのかなあ。みんなどうしてるのかなあと気に掛けることがね。さっき見せたように例えば、その一般的に言われる授業案検討、デザインというのを全員でやるというのはそういうことなんです。他の学年はどんなことをしようとしているのか、とか、他の人はどんなことを考えるのか、そうするとワールドカフェ形式で色んな人の意見を聞くことが出来て、常に気にかけられる。「あ、そういえば、あの人今度こういう授業するって言ってたよね。」って言ったら、そういう授業の資料を持っていくことが出来たりとかね、アドバイスしていく。という風に、常に気に掛けること。

で、日本の教員が一番下手なのは、自分のことを気にかけることなんですよね。子どものことは気にかけるけれど、自分のことをケアしない。自分をケアしないと、やはりどうしても自分の身体が弱ってきますので、健康ではない、元気ではない状態になっていきますので。当然、他者とか見えない他者とかそういうような所まで想いはなかなか及ばないです。ESD、ESD って言いながらどんどんどんどん疲弊していってはだめなのです。そこのところが大事なので、是非、今のところを理性と感性の両面から、理性の部分も重要なんですけれど、やはり感性も十分働かせながらいくこと。学び続けるものを元気づけること、これが ESD なんだ、と言うことができます。これはユネスコがすごく大事にして言っているところだと思います。先生たちがつながって元気でいること。お互いにケアリング。壁を作らずに橋を掛けよう。壁をとにかく沢山作りますので、壁をどんどん壊して橋を掛けていこうという実践を、永田台小学校では日々そういうことをやっていっている。授業ではどうやっているかというのは、また後の小学校部会にてお話をしたいと思います。サステイナブルマップというのがあったりします。あとルーブリックについてもありますので、それはまた分科会の方でお話しします。

ホールスクール・アプローチって何なんだろうな、と多分思われたと思うのですが、よく分からない方は一度永田台にいらっしゃって下さい。きっと帰られる頃にはうん、そういうことか、と何となく分かって頂けるのではないかと思います。以上です。どうもありがとうございました。

○司会　川田　力（岡山大学大学院教育学研究科）

住田先生、ありがとうございました。手元の資料にあります、ESD フローラという、ESD と身近なことを繋げる、授業と生活を繋げる、学校と生活を繋げる、総合と教科をつなげる、それにまして教室と職員室を変えるという学校の取り組み、非常に詳しく伝えて頂きました。永田台小学校の先生にお会いしますと、非常に楽しそうに ESD をやっているという印象を受けていて、ESD をやっていると学校が明るくなるという取組になるのではないかという風に思っております。また、分科会で更に小学校での取り組みについて詳しくお聞きできると思いますので、参加される先生方、ぜひよろしくお願いいたします。

それでは引き続きまして、教科間のつながりを重視した ESD 実践ということで、金沢大学附属中学校の戸水先生からご報告を頂きます。どうぞ先生、よろしくお願いいたします。

②「教科間のつながりを重視したＥＳＤ実践」

金沢大学附属中学校　教諭　戸水吉信

金沢大学附属中学校の戸水と申します。どうかよろしくお願いします。我々は国研の指定を去年まで受けていました。教科の方から ESD の実践を、ということを言われており、教科間の繋がりを重視した ESD 実践を行ってきました。その一端の方を説明できればと思います。

本校ですが、石川県の金沢市というところにありますが、実はユネスコスクールは 56 校中 44 校ということで、大変多いです。中学校は 24 校中 7 校ということで、すみません、うちの学校はユネスコスクールではないのですが、そういう環境にあります。本校は、桜がきれいな季節だと、だいたいこんな感じのところです。先程も申し上げましたが、国研の指定を受けておりまして、24・25 年度が、社会・理科・英語で教科の指定を受けており、26・27 年度に ESD の指定を受けることになりました。実は社会の指定の時に、国研の調査課長の浜野先生という方に大変お世話になり、今度も講演に来て頂きますけれども、その浜野先生の繋がりで、何か国研の指定を受けたいと言うと、学校全体で ESD というのもあるということでご紹介頂いたのがきっかけです。それで、なぜ ESD の指定を受けることになったのかを少しだけ説明しますと、国研の指定を受けて国研のこのリーフレットを元に研究を進めておりますが、例えば ESD の視点に立った学習指導を目標とか、それから学習 ESD の視点に立った学習指導で重視する能力･態度というこういうものがあるんですが、それが例えば先程の学習指導の目標が本校の教育目標と大きく関わっているというところがあります。実は教育目標は近年作り直したものです。当時の管理職が「どうも先生方が

教育目標に従ってやってもらっているものが、少し古かったもので、何か今までやってきた教育目標と先生方の意識のずれがあるのではないかな。」と言うので、これを作り直しました。

実はこれ、これだけしか文章は無いですが、これを作り直したもので、これに実はワークショップを 3 回やっているのです。住田先生の先程の昨日お話しをお伺いして、ぜひ住田先生みたいな校長先生の下で働きたいなと思ったのですが、やはり我々の当時の管理職もそういうトップダウンでものごとを下すのではなく、これも先生方の思いを込めて教育目標を作りたいと言った。多分これが、うちの学校が ESD をやることになったきっかけだと思います。それでうちの学校は大学の附属で、一応試験をして入ってきていますので、生徒はペーパーの点数は取れています。だけど当時の先生方の想いとして、ペーパーの点数だけ取れても世の中で役に立たない、そういう人はやっぱり育てたくないというのがあった。ということで、やっぱり何か、「社会使命を果たす」と書いてありますが、要は社会に出て人のためになること、そして可愛がられる、そういう生徒を育てたいなという先生方の想いが込められて、この教育目標が出来たということになります。それが ESD の目標で例えば、「持続可能な社会づくりに関わる課題を見出す」とか、それから「持続可能な社会の形成者として相応しい価値観を養う」ということに合致しているのではないかということで、ESD の研究をやろうかなということになった。浜野先生にご紹介頂いたこともあって、これならみんなでやっていけるのではないかということで、ESD を本格的にやろうと。それまでは、少し家庭科の教員とかもやっていたのですが、学校全体でやっていこうということになりました。それから、思考力の研究をやっており、そういうことと、先程も述べた色々な能力・態度がありますが、これも今までの思考力の研究が活かせるのではないか。そういうこともあって ESD の研究を始めようということになりました。

では、実際にどういう風にやっていくか。実は国研から出ているリーフレットで、教材のつながり、能力・態度のつながり、それから人のつながりという、３つのつながりがあるのですが、こういうことを中心にやっていこうと。まずはどこから手を付けようか。教科を主体としてやっていくという方向性で受けたので、やはり教材のつながりからやろうかなと。そこで、26 年～27 年に指定を受けている時にはこの教科間のつながりをめざしたカリキュラム開発。こういうことを副題にした取組と、教科間のつながりを重視したプログラムをやっていく。今年度は能力・態度のつながりの方に移行していますけれど、こういうことをやっていきたい。今日はこちらの方をメインに話させて頂ければと思います。

実は今、私たちの学校は教科を主体としているので、総合的な学習の時間からのアプローチは中心ではない。ちょうど３年目に入り、家庭科の教員が ESD の先行研究に取り組んでいましたが、では、何か取組やすい教科でやるだけでなく、すべての教科がつながりを意識しながらアプローチしていくという、そういう研究のスタイルを取っています。

具体的には、「研究推進委員会」や「研究全体会」というのがあるのですが。「研究推進委員会」というのは、私が研究主任を務めさせて頂いていており、先程言いました家庭科の教員と、それからこの社会の教員というのが、前任校でユネスコスクールの担当をしておりましたので、そういう人たちが核になって、研究の方向性をつくり、「研究全体会」で、職員会議とは別に皆で研究についての色んなことをシェアしていく。そのような進め方をしました。ただ、これが大事で、のちほど出ますが、「研究全体会」というのは、先程住田先生もワークショップ形式で職員会議を、というのはありましたが、みんなが座って突き合わせるんではなくて、ワークショップをやっていくという、そういう形態で進めています。

具体的には、まずは「教材のつながり」で、教科間の繋がりを持とうということ。各教科の年間指導計画を貼りだします。これが張り出される場所が重要で、実はこの後ろに何があるかというと、自由にお茶が飲めるスペースがあるところに貼りだしてある。ということで、先生方もそうやって休んで、お土産をもってきたり、お菓子を広げたりっていうところの後ろをぱっと向くと、いつでも年間指導計画が出ていると。教科書コーナーということで、いつでも他の教科の教科書が見れる。そういう風な環境整備をしていくというところです。

それから、『ESD 週刊マイベスト』というのがあります。のちほど説明しますが、ワークショップを行って、この教科のここと、この教科のここが繋がって実践が出来るのではないかと言う。ですが、それだけだと時間が無いので、例えば ESD に関する実践をしました

と。例えば、これは私のですが、数学で ESD を実践しました。それが社会とつながれるのではないのってことを、求人広告みたいにバンっと社会の年間指導計画のところに貼っていくんですね。そうしたら社会の先生がそれを見て、「あ、数学の先生が何か貼ってくれている」と。「じゃあ、うちもこの教材に関連して何か実践が出来ないかな。」ということをやっていく。ただ、数学はあまり人気がなくて、私は求人広告を沢山出しているのですが、あまりオファーがなくて、社会は人気があって、色んな教科が貼るんですけれど。そういうことはあるのですが、自分がつながれると思う教科のところに貼っていくということを実践していくということです。

それで、もともとはその求人広告を貼るのですが、それだけだと貼る先生と貼らない先生が出てきますので、先程言いました「研究全体会」で、ワークショップを行って、実際に色んなアイデア―自分の単元で、こういうところで ESD が実践できそうだ、ということ―を、ポストイットに貼って、これを、例えばこれ「ゴミ」と書いてありますが、「ゴミ」関係のことで何か色々なことが出来るのではないか、とか。この時には「江戸プロジェクト」というのがありましたが、江戸のエコ社会のそういう文化とか江戸のリサイクルのところで何か出来ないか、とか。そんなことを話したりしています。これが一年目です。これで大体こういう実践ができそうではないか、ということを共有し、二年目は、これを元にカリキュラムマップを作るのです。

このカリキュラムマップの前に立って、実際にじゃあどういう風にやっていくか、実際に、教科間で実践できそうなまとまりをユニットと言うのですが、ユニットが出来そうではないかということを、学年ごとにやっているんですが、立ってお互いに移動しながら学年のところへ移動して話している。それから大学の先生に来て頂いて、先生を交えて色々と実践が出来ないかなということを話している。こういう形で教科間のつながりを『週刊マイベスト』とか、こういうワークショップをやって教科間でつながって実践できるようなことを探していくということをやりました。その結果できたのが、このカリキュラムマップです。お手持ちの緑の研究紀要に、折込で去年まで作ったのが入っているのですが、これ、実は ESD カレンダーという有名な実践があり、そのようにまとめても良かったのですが、我々は是非、その近い所にお互いに繋がってできるものを配置しようと。ここに勝手にだいたいこういう分野があるのじゃないかと、ユネスコスクールの資料を参考に、10 の分野を作り、例えば環境という分野でこんな実践が出来そうだ、というところにプロットして、そしてつながりのあるところを矢印で実践順番を示していく。このようにカリキュラムをまとめてみました。厳しいのは、これは最終的にはやったものしか載せないという

ことにして、出来るか出来ないかを別にしてとりあえず載せるということは無しにして、やったものだけ載せていこうということにしました。その結果、例えばここの「生物多様性」とか、「貧困問題」といったところは、実は何も実践が無いですので、それはやはり教科の学習では難しいのかな？とか、お互い教科が繋がってするのは難しいのかな？ということになっているんです。無理に埋めるのではなく、先生方がやる気になって、実際にやったものでプロットしていくという作り方をする。こうやって実際の ESD の実践を見えやすくする、ということをしました。そして先程の教科間のつながりを「ユニット」と呼んで、これが「教科間のつながりをめざすカリキュラム開発」と副題に書いてきましたが、これを指すということ。

あとは、先程のカリキュラムマップ。カリキュラムマップに対応した形で、「実践事例」を作成しました。これは何かと言いますと、カリキュラムマップを作り、そして実際にプロットする。こういうことでお悩みの学校あるかもしれませんが、よく“担当者が替わったら実践が途切れてしまう”ということが実際にあるのかなと思います。「実践事例」は、なんで作っているかと言いますと、ESD の先程言った「ユニット」を実践し、A４の紙一枚に実際に図などを貼って、どんなことをやったかをまとめていく。そうすると、担当者が替わっても、去年このようなことをやったというのを見て、また自分のアイデアで同じような実践が出来るのではないか、もしくはそれをまた改良してやっていけるのではないかということ。「実践事例」を作成して、蓄えていきました。ということで、去年までにだいだい５０あまりの実践事例と 18 のユニットが出来ているので、ESD なかなか進まないなと最初は思っていたのですが、ワークショップを重ね、そういうことをやる中で実践事例が出来ていったということになります。

ちなみに、先程ワークショップのところで言い忘れましたが、1 回のワークショップの時間はだいたい 30 分と決めています。教育目標を作る時のワークショップも当時の管理職が 30 分でやめようと。それで結論が出なかったらまた次にやればいいじゃないか、と。で、我々のやり方ですが、一回一回の時間は短くして、回数を重ねることで、お互いの共通理解を図っていきましょう、というやり方をします。それで私は研究部会も、だいたいどれだけ長くとも 1 時間ぐらいしかやらないんですが、1 時間やって結論出なかったらもう一回やろうと。他の研究部会ではそういうのは無いのですが、テストの午後に集まってもらって申し訳ないから、ちょっとシュークリームでも食べながらやろうと。シュークリームを買ってきて、楽しみながら研究部会をやるとか、そういう方向性ではやらせて頂いているのです。我々いつも一本の授業に対して全員でがっと会議みたいなのをして、授業整理化

とかしていたんですが、そうではなく、三本の授業を同時にやって、お互いに小グループで意見を出し合って、共有したりしようとか、そういうことをやっています。

それでは、実際にどうやってつながりを持ってやっているか、どのような実践事例があるのかということをご紹介申し上げたいと思います。まずは例えば 1 年国語科、1 年美術科で、「大人になれなかった弟たちへ」。平和教育に関係しますが、これ戦争で大人になれなかった子ども達を扱った題材ですが、挿絵を元に、国語と美術で教科学習を進めるものです。それから、1 年の社会・理科・技術で、森林を題材にするのですが、理科では光合成について勉強する。社会科では、森林伐採の環境への影響についてやる。技術では木材の種類・利用法、間伐材とかそういったことについて学習する。それぞれの教科の視点で一個の例えば森林というものを題材にしてユニットを組むのですが、それぞれの教科の視点で「森林」について学習をする。これは光合成の実験ですね。これは社会で見えにくいですが、お互い班どうしで立って話し合いをしているというところです。これは技術で、見えにくいですが、「こういう材料の使い方がある」と生徒がプレゼンしている。それから 2 年は家庭科と英語で、セヴァン・スズキのスピーチ。Change Your Lifestyle です。家庭科で核になっている教員ですが、例えば What is your lifestyle?とか、英語の授業でスピーチを考えたりして、それが家庭科の「より良い生活」につながり、最初は英語と家庭科でユニットを組んでやっていたんですが、社会科も「それ良いから、やらせて」と言って、社会科の江戸時代のエコ社会とも繋がった。ユニットが広がっていった例です。

これは国研で発表させて頂いた例ですが、3 年、国語・社会・音楽で、金沢市は中学生が地域の伝統芸能ということで、能を見るんですが、これをそれぞれの教科の視点で学習をするという、ユニット「能」になります。生徒の感想ですが、「国語では歩き方、姿勢などを学びました。音楽では、能は音楽・演技・舞踊で出来ているということを学びました。社会では能は誰によってつくられたのかと。そういうことを学びました。」ということです。他にも「伝統文化を継承していくことの重要性を学ぶことが出来た」とか、「社会で学んだ歴史との繋がりとか、音楽で学んだオペラとの繋がりが見えてきた」とか。「能の勉強を通じて、今まで勉強してきた 10 弱の様々な教科は全て繋がっているんだと分かった」とか。能の学習を通じて、生徒はそんな風に感じているということです。もしくは、他の伝統文化についても調べてみたいと思う様になったと。ただ、「正直に、能をまた見に行きたいとは心からはまだ思えていない」というコメントもあるんですよ。「ただし、能について大きな意味など調べてみたいと思います。」とか、「直接能の伝統継承に関わることが出来なくとも、見に行ったりすることで関わることが出来る。」とか、そういう感想もあります。こ

ういったコメントを残していて、能を後世に伝えていく。そういった学習が出来たということです。実はこの能の学習、今年担当者が替わりました。同じ音楽の担当者ですが、ただ先程の実践事例を残しておくことで、今年また社会と国語の担当者が替わったんですが、去年の実践事例を見て、「じゃあ今年、自分たちはどうするか。」ということを考えて、去年考えて作ったユニットが今年もこうやって実践されていくという。去年と全然授業数は違うのですが、そういうことにも繋がっていく。これは国語ですが、今年は「能を見る観点を決めなさいということで、学習した舞とか、体の動きとか、衣装とか、能面について別々の視点で生徒がこういう視点で能を見たいよ、ということを言ったりとか。これは音楽の教員で、歌舞伎と能を比較することによって、同じ船弁慶の素材で、どうやったのか、ということを正直に書いている。それで良いなと思うのは、歌舞伎と能でどっちが気に入ったかというと、「やっぱり歌舞伎が気に入った」と言っているんですけれども、じゃあ、「能はなぜ続いているんですか。能の魅力って何？」というところ、書かせている辺りが、さすが二年目で頑張ってやっているなと。そういう感じで音楽科と一緒にやっていると。だいたいこういう風な教科間のつながりを重視した実践をやってきて、こういう風にユニットを組んでいったということです。あと、時間が無いので、能力・態度の繋がりについては省略しますが、ただ能力・態度ですが、やはり教科を主体にして考えています。たとえば体育の授業で全体を見て計画を考えるようになったとか。理科と技術で一緒にしたので、使いやすさと環境の繋がりを考えるようになったとか。特に社会の時間で、過去の出来事を理解した上で、未来について予測することが出来るようになったとか。それから環境問題などの情報を得ても、今までは「そうなんだ。」としか思えなかったが、でも ESD の学びを深めていくにつれて、「私には何ができるかな」とか「どうしたらこの問題を解決できるかな」というような思考が出来るようになったとか。そういう風なことを生徒が感じ取っているということです。概ね教科を主体としてやると、国研のリーフレットに出ている１から４の力が伸びたということですが、あとここら辺が伸びていないことも課題なんですが、そういうことも含めて、今年は能力・態度のつながりという方にも重点を置いてやっていきたいなと思います。

私も住田先生の学校の方に本当にお伺いしたいなと思ったんですが、本校にも興味を持っていただけたらと思います。本校は 11 月 23 日に今年は能力・態度の繋がりをもとに研究発表会をしますので、もし宜しければ金沢の地にもお越し頂ければという風に思いますので、また宜しくお願いいたします。どうもご清聴ありがとうございました。

○司会　川田　力（岡山大学大学院教育学研究科）

戸水先生ありがとうございました。ESD の進め方というのは色々あるんですけれども、ここでは教科の繋がりを元にカリキュラムを組んでいくということに取り組まれていまして、話の中でも様々な変化があったという風に思います。実際に出来たことだけ書くカリキュラムマップだとか、あるいは実践事例集を蓄積していって、それを改善する取組など非常に興味深く拝見いたしました。また、生徒の感想の中で、ESD を学ぶにつれて以前は環境問題について聞いても「そうなんだ」としか思わなかったけれども、授業を深めるにつれて、「私には何ができるかな」ということや「どうしたらこの問題は解決できるのだろうか」というような思考が生まれるようになったなど、生徒が成長している様子が伺えました。戸水先生、本当にありがとうございました。それでは引き続きまして広島県立広島井口高校の永尾和子先生、「アクトアイ(ACTI)における ESD の実践」ということで、ご報告頂きます。永尾先生、よろしくお願いいたします。

③「ACTI における ESD の実践　～ハワイ姉妹校とのペンパルアクティビティを通して～」

広島県立広島井口高等学校　教諭　永尾和子

こんにちは。広島から参りました永尾です。よろしくお願いいたします。私は表題にありますように、「ACTI における ESD の実践」ということで、本校の取り組みの 1 つをご紹介したいと思います。ユネスコスクールである本校は主に総合的な学習の時間を通して ESD に取り組んできました。タイトルにある ACTI（アクトアイ）というのは本校の総合的な学習の時間のニックネームです。総合的な学習の時間は必ず何らかのニックネームをつけるということになっていて、本校の場合 ACTI ということになっています。ACTI 自体は非常に大きなプログラムで、これについて全部喋れば一時間では到底足らないようなものだと思います。今日はその中からハワイにあります姉妹校、アイエア高校という高校との文通活動、「ペンパルアクティビティ」と呼んでいる活動を中心にお話ししたいと思います。

まず、今の ACTI が成立するプロセスを時系列で説明したいと思います。まず、本校は姉妹校が二校ありますが、平成 10 年、オーストラリアのタスマニアにあるエリザベスカレッジと姉妹校提携しました。広島県でも多分最も早く姉妹校提携した学校ではないかと思っています。平成 12 年、10 月 28 日ですが、ハワイ州のアイエア高校と姉妹校提携の調印式を行いました。これで二校の姉妹校が出来ました。平成 14 年、この年に本校のハワイ修学旅行が始まりました。この木は何の木かご存知ですか？『この木何の木？』の木ですね。

ハワイでは「HITACHI ツリー」と言われています。平成 14 年はもうひとつ大事な年で、総合的な学習の時間が始まった年であります。この年は私はまだ前任校にいて、前任校では「総合的な学習の時間？なんじゃそら？」という感じで、何の用意もしていませんでした。いよいよ平成 14 年が来て、どうするんだという時に、「あなたお願い」と渡されたので、ゼロから作りはじめました。ひどい目にあったので、忘れられない年です。いきなり飛びまして平成 20 年、今の井口高校に参りました。これでやっと総合的な学習の時間から解放される、と思ったんですが、赴任初日から学校長に呼ばれ、「総合的な学習の時間を作り直してくれ」と言われて、「え？」と思ったのです。もう 6 年もたっているのだから井口にも何かしらやってきたものがあるだろうと思ったのですが、とりあえず 1 年様子を見ようと思っていました。理論的には素晴らしいものがあったのです。ACTI とは、最初に作られた方々が一生懸命考えられた意味があるのです。私は最初にこれを見た時に、最初に作られた方々が一生懸命考えられ、生徒に求めたいものに対する気持ちがすごく伝わってきて、一生懸命作られたというのがよく分かりました。ですが、1 年間ずっと見ているとやはり改善すべき、改革すべき課題も多いなという風に思いました。

まず 1 年生は簡単に言うと、教師の体験を聞いていく。そして、小論文を書く。2 年生は、ハワイについての学習。ハワイ修学旅行がありますからね。3 年生は課題、という受験勉強をしていました。これ、当時の高校には結構多かったんじゃないかと思いますが。まず、２年生のハワイについての学習は、自主教材を作っていまして、私も読んだのですが、実によくできている素晴らしい教科書。全て英語で書いてあります。ですが、それをずっと読んでいくので、まるで Reading の授業で、だいたい生徒は寝ていました。素晴らしい教科書なんですが、総合学習の時間としては生徒にとってしんどい授業となっていました。3 年生のこれは、やってはダメですね、これは。ですから、これでは ESD の前に、総合的な学習の時間として成り立っていないなと。そういう所がありましたので、ハワイと小論文というキーワードだけ残して、すべてやめました。ダメだと思ったらやめる。これはすごい大事なことだと思います。でも、やめたら全部なくなるので、またゼロからの出発になってしまいました。まあでもしょうがありません。

まずは、ひとつひとつ、一時間一時間考えていきまして、これ、現在の ACTI のプランなんですけれども、全部これを語ったら非常に長い時間がかかりますので、今日説明しますのはこの辺りの部分なんですね。これが、ペンパルアクティヴィティの部分なんですが、そうは言っても最初からこの部分で行くことは出来ませんので、最初は 1 年生の ACTI 1 から手を付けました。平成 21 年のことです。平成 22 年に今、お示ししたペンパルアクティ

ビティが入っているACTI２の改革にこぎつけた。この年は記念すべき年で、本校はこの年にユネスコスクールに加盟した。その記念すべき年に国際理解を中心とするACTI２の改革に手を付けたというのも、何かの因縁かなという風に思いますが、ご存知のようにESDにはさまざまな分野がありまして、本校では姉妹校が二つもあるということから、国際交流が進めやすいと思いましたので、持続可能な国際理解の態度、そういったものをどうやって持続させ、発展させていくかということを含めて、ACTI2の改革に手を付けました。

それで、それまではハワイについての学習で、座学で個別学習であったわけなんですが、それをハワイの修学旅行を活用した学習にしていこう。そして、活動を中心にしていこう。個人ではなく、グループで協働的な作業を取り入れて学習していこう。皆さん、活用、活動、グループでの協働作業。これで何かを思い出しませんか？アクティブラーニングとありますね。本校ではカリキュラムマネジメントに取り組んでいますが、その中で中心はアクティブラーニングです。アクティブラーニングの中心が、実は総合的な学習の時間になっています。その考え方で、ACTI2で改革をしようと思った瞬間、平成22年、世界的なインフルエンザの大流行でハワイの修学旅行が中止になってしまいました。姉妹校との交流を中心に何か面白いことをやろうと思ったのが、中止になりました。「がーん」という感じですが、何か困難にぶち当たった時、その時こそがアイデアが生まれる時ですよね。実はその当時、アイエア高校と本校の関係が少し上手くいかなくなってきていました。きっかけはたわいないことで、ここにバスがありますが、許可なくここまで入ったということで学校長を激怒させてしまった。他にもあったとは思いますが、非常に怒って、色々なことが上手くいかなくなってギクシャクしていたんですね。それもあり、修学旅行にも行けなくなってどうしようと思ったのですが、逆転で発送して、行けないからこそ、交流しよう。行けないならどうするか、手紙を書こう。本校はメールが出来るほど環境が整っていません。文通を古いけれどしようと。行けないから交流しようと言えば、校長の気持ちも和らぐんではないかと打算もありまして、連絡を取ったら、なんと、校長の態度もコロッと変

わり、その後は非常に協力してくれるようになりました。それからペンパルアクティビティが始まるわけです。要するに、姉妹校との継続的な文通ですね。1年間を通じて文通をします。ハワイの修学旅行に行く前に、文通を始めて、自分のペンパルを決めます。だから、漠然とやりとりするんではなく、自分の個別のペンパルに書いて、修学旅行に行くときには、そのペンパルに会います。おみやげを持って行って、交流をします。帰ってきたら、クリスマスカードを書いたり、バレンタインカードを書いたり、そういう文通活動を年間を通じてやっていくわけです。その間に互いの文化の違いを知る学習活動など、特にこの修学旅行を中心とした活動の中にはいろんなプログラムを入れておりますので、それを通じて生徒は色んな文化の違い、歴史を学んでいきます。それで、先程言いましたように、国際理解の困難点を乗り越える力を養うということです。

国際理解は、言葉は綺麗ですが、私は生徒に最初に「国際理解なんてそんな簡単にできません。」と言います。世界に出れば、「本当になんでこんな人なんだろう？」という人が、沢山います。身の回りにもいるかもしれませんが、世界に出たら本当に考え方も違うし、腹が立ってしょうがないと。憎たらしくなる。そういう様な人がいっぱいいるんだと。その人間とどうやって上手くやっていくかを考えなければいけない。それが出来た時に、本当に持続可能な国際理解が成り立つわけです。だから、困難なことが起きた時がチャンスなので、生徒たちになるべくそういう機会を与えようと考えています。まさに私はESDではそれが非常に大事なことだと思っています。持続するために、困難があった時に負けていたら持続しません。困難は招いてでもあった方が良い。それを乗り越えるために知恵と意志の力で乗り越えていく、持続していくのだと思います。

具体的に言いますと、これはクリスマスカードです。ぱっと見た時にどちらも綺麗に書いていますね。でも、これは２、３年経ってからこうなりました。最初ハワイのカードは本当にぐちゃぐちゃ。字は汚い。読めない。鉛筆だけ。ぐちゃぐちゃでした。無理やり書いたからかもしれませんが。やっているうちに、向こうの方がきれいになってきました。日本の子ってきちんと書きますよね？先生に書けって言われているのもあるかもしれませんけど。ギブアンドテイクですね。交流というのは決して一方から与えるだけのもの、一方がもらうだけのものではない。こっちも一生懸命やりますけれど、その気持ちが向こうにも伝わりますので、向こうも変わる。そうすると、それが面白くなり、次に繋がっていくと言うことがあるのです。互いに文化の違いを知るというプログラム、様々なプログラムがありますが、そのうち異文化を知るプログラムとして最も中心的なものが、クロスアート。単純に互いに絵をかいてそれを交換するので、クロスアートというのですが、グル

ープでテーマを決めて、1 枚絵を描く。その年は、水。ハワイや日本は水に囲まれているので、描きやすいだろうと。祭りというテーマを扱った時もありました。そして、食べ物もありますし、遊びというテーマでやったこともあります。で、水というテーマでグループで何を描こうかなというのを話し合いさせて、1 つのテーマに決めて、描くわけです。

これ、どっちが描いたか分かりますよね？これ日本の生徒。こっちがハワイ。やはり見た感じが違いますよね。期待される人物になりたがるのが、日本人なのかもしれませんが、先生が描いてと言った時に、日本の伝統文化を伝えようとする。「水の東西」というのが教科書に出ていたりしますから、ししおどしとか、こういうのがテーマになるんですね。ところが、ハワイの方はやはりサーフィンとか、日ごろの日常生活が題材のものが多いです。このクジラなんて面白いですね。見えにくいかもしれませんが、こう釣り糸がずっとあって、たどっていくと船があって、この船に日の丸がついている。捕鯨に対する何か意見かな？という、そういう感じがしますよね。これは何かというと、こうやって描いた絵を交換、互いに送るんですよ。で、一切説明はつけないです。もらったら、一体これは何を言っているんだろうかと、何の絵なのか、何が言いたいのか、どういうメッセージがあるのか、というのをお互いが話し合うわけです。話し合ったことを英語でまとめるわけですね。そして、修学旅行の時にこれを持っていく。向こうにはこっちが送ったものがありますので、向こうの体育館でこうやってお互いに絵を説明します。最初は私たちはこんな風に思いました、というようなことを英語で言います。その後、実はこういう意味なんだという説明を試合、その違いを感じる。教員の方で補足をしながら、アイエアの高校生の絵の傾向、日本の高校生の絵の傾向があるということを体育館で話し合いながら、お互いの違いを感じる。これがクロスアートという学習です。

お手元にハワイのことに関して書いてあるプリントがあると思うのですが。『ディスカバーハワイ（ハワイを発見しよう）』。これは何かというと、学年会と協力して、総合学習ではない、ロングホームルームでこれを修学旅行に行く前にやるわけです。学習をすると言っても、そのプリントを 30 分か 40 分ぐらい読んだ後、この番組が始まる。放送部なので、番組を作るんです。放送部がナレーションをやっていますね。そのプリントの最期に小林克哉の『噂のカムトゥハワイ』が載っていると思いますが、広島は海外への移民の数が 1 位なんですね。岡山は調べると 7 位だそうです。そういう歴史も生徒たちに考えさせたい。ということで、そういった資料も使い、学習も深めていくことになっています。これ、楽しいですよね。「きんさい、きんさい、ハワイへきんさい」という歌なんですが、ご存知ですか？端折ってすみませんが、アイエア高校は毎年日本にホームステイに 10 人ぐらいの生

徒を連れてきます。その時に引率をしてくる日系人の先生に少し語ってもらう。そういうのも放送を通じて、みんなに聞いてもらう。最後に今から少しだけお聞かせしますけれど、そのプリントの中身、どうやってそれを生徒に読ませるか、楽しんで読ませるか、ということで、クイズも作って、そのプリントの中から ALT が英語で 5 問出します。そのクイズの解答がこれです。かなり良いプレゼントが出ます。本格的な番組になっています。

(放送)「豪華なプレゼントもありますよ。Hello, everyone! Welcome to Hawaian Quiz!...。時間が無いです。一問ぐらい皆さんに解いて頂きたかった。ハワイ語で、「美味しい」というのはどう言うか、とか。「ウノ、アノ、オノ」。…「オノ」なんですが。

これは組体操。これは今はやっていませんが、本当にびっくりされます。ハワイではなかなか出来ないそうです。行進もなかなかできません。向こうは素晴らしいフラを見せてくれます。こういうお互いのパフォーマンスの紹介もします。そして授業にも参加させてもらう。これが出来るようになるまでに何年もかかりました。さっき言ったように、なかなか校長が許可してくれませんでしたが、色々取り組んでやはり仲良くなるっていうのは大事ですね。ついにホームルームに入っていけるようになった。最初は「授業が遅れるから駄目だ」日本もハワイも言う事は変わりませんね。だから、ダメと言われていたんですが、何年もかかって、ついに今は普通に授業に参加できるようになりました。

クラフトを作る。こういう体験を一緒にやることによって、生徒は色んな体験をします。こういう体験を通して、生徒が一番思うのはこれ。

「英語が話せん」「もっと話せれば良かった」「もっと勉強すれば良かった」

それから、「ペンパルがいない」。

これはどういうことかというと、日本だったら海外からペンフレンドが来ると言ったら、少々無理してでも学校に残りますよね？ハワイはそんなことはありません。自分の都合があったら帰ります。学校は日本から井口高校からペンパルが来るから、放課後残りなさいなんていう命令は一切できません。保護者が帰れと言えば、当然帰るし、個人の自由であります。学校が命令することはできません。だから行ってみたらペンパルがいないということは、ざらにあるわけですね。私はそれは事前に言っておきます。「そういうことは普通だよ」って。最初言ったように、「それが国際交流だよ。」って。上手くいくわけがない。言ったらいない、というのは当たり前。考え方が違う、文化が違う。その時にどうするか、なんですよね。担任の先生に手紙を残してことづけます。必ず相手に渡るようになっています。向こうから御礼の手紙がきます。ですが、そういう場面にいかに出会わすかということが大事なんですね。

これはもう飛ばしていきます。年間プログラムはペンパルアクティビティは第二期に入っていますが、それだけではないということが分かりますね。1 年間のプログラムはこれ自体も大きいものですが、ペンパルアクティビティの中にもさまざまなアクティビティがあるわけです。その第三期の英字新聞がお手元にあるものです。今年の二月に出来た、最新号です。頑張って 100 部持ってきました。9 月にオープンスクールがありまして、中学生が 1000 人近くやってきます。その中学生に配る分の残りを持ってまいりました。これは主に二年生の文系の生徒が作っています。これを通して、英語を通して自分たちの考えを表現することが出来るようになっていきます。一番最初にやる切り抜き新聞という発想で、自分たちが見つけたテーマでずっと調べ学習をして、それをまとめたもの、それとハワイに関する学習。それらを合わせていきます。中国新聞が 10 万円で協力してくれて、2 月に広島印刷センターで印刷をしてくれます。ブランケット版のものを 2,800 ほど作ってくれます。普通は 10 万円では絶対にできません。かなりボランティアでやってくれています。最後、ここでは書くという作業ですが、英字新聞の後、スピーチをする。バイリンガルプレゼンテーションをする。なんでバイリンガルかというと、スライドは日本語です。でも喋るのは英語で、五分間全く原稿を見てはいけないということになっているので、生徒は 5 人のグループで、入れ代わり立ち代わりプレゼンをします。なんで日本語かというと、見る人が全部英語だと分かりません。1 年生は全く分からないので、日本語だとどういう中身なのかということが分かります。喋っている方も、日本語を見ながら英語を喋るという難しいことを、バイリンガルプレゼンテーションということでやっています。

こういう活動をどうやって続けてやっていくか。総合学習自体が続かないと、学校全体の取り組みも続かないということで、生徒と教員の目標を書いていますが、明確な目標が生徒に伝わること、なんでそれをやるのか、ということが伝わっていること、そして具体的な内容が出来ているということ、成果と達成感を生徒が味わえるということ、英字新聞を作る、それから切り抜き新聞を作る、これも中国新聞に出して必ず毎年入賞者が出ます。小論文も 1 年生で書くんですが、必ずコンテストに出していくというそういう目標を作っています。賞を取るということは大きな達成感を得られますので、生徒にとっては楽しい活動になっていきます。この生徒の顔を見て、先生は動きます。教員を動かすのは、生徒を動かすより大変なので。でも生徒が動けば、先生は動きます。その先生がより動くようにするには、そのプログラムが誰にでも出来るように作られていなければいけません。1 番大切なことは、負担を感じずに出来るようになること、とても大切なことですね。ですから、そのプログラムが続いていくために大事なことは、私はこのように思っているわけで

す。最後に一番大事なことは、マイナスをプラスに変えるという、この発想です。問題解決に繋がる新たな価値観を創りだそうという意志。それから関係性を持続させたいというもっと強い意志。そして状況を把握して、多面的に考えてその状況を打破しようとする、その実行力。代替案を模索するための知恵と工夫。私はこういう力を養うことが ESD ではないかと考えてやってきました。

96。これは何の数かと言いますと、総合的な学習をすることによって、コミュニケーションの力が高まったと、アンケートで答えた生徒のパーセンテージです。ほぼ全ての生徒がその総合学習において力をつけたと感じているということです。その生徒の顔に動かされて、先生も大変だけれどやるという。楽なものはありませんが、やっていることに意義を感じられて続けていくことが出来る。それで、私がいなくなっても続いていくことが大切なので、私は 2 年前にこのプログラムのリーダーを引退しました。次の人が育つことが大切なので、今はオブザーバーという形で関わっています。そうやって後の人を育てるということもやはり大事なのかなと思っています。すみません、長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました。

○司会　川田　力（岡山大学大学院教育学研究科）

永尾先生ありがとうございました。姉妹校との交流を通じた非常に内容の濃い総合的な学習の取り組みをご紹介頂きました。その中でも、生徒の皆さんが、コミュニケーションの力や ESD で重要とされる力をつけたということを実感されているということが重要だったと思います。以上で本日のプログラムの前半部分の実践報告、三名の先生がたによる実践報告を終えたいと思います。ありがとうございました。

（３）ワークショップ

「ESDを学校現場で持続発展させるために―『2学期からできる！』アイデア集づくり」

【小学校分科会】

〇ファシリテーター　原　明子（岡山市　ESDコーディネーター）

分科会の説明をさせていただきます。分科会のファシリテーターを担当します、岡山市でESDコーディネーターをしております、原　明子と申します。

皆様、グループメンバーにお知り合いの方はいらっしゃいませんよね。

今日は60～70分しかありませんが、この分科会のゴールは２学期からすぐに使えるアイデア集を作ることがゴールです。

作り方ですが、ここにＡ３のケント紙があります。

これを各グループにお配りして、最高５枚まで、最低１枚は最後に出してもらいます。

話し合いの中で、この様な事をしたら学校でESDが持続的にやっていけるのではないかというアイデアを出していただきます。

その前提となるところは、３段階あります。まず１つは先程のお話を聞いて、住田先生の回答をいただくことが１つのヒントですね。もう１つは、大切に思ったことをそれぞれが書いて下さっていると思います。それを聞きながら、これは自分の学校がもう少し頑張らないといけないという課題も出ていると思います。それを今からグループの中で出し合っていただきます。つまり３人の小・中・高ではありますが、様々な事をされている先生が、大切だなと思ったことがあると思います。自分の学校ではこのような事が出来ていない、これは出来るようになったらいいなと思ったことを記入してください。

全て単純ではないとしても、自分の学校でもできたらいいと思うこと。ではそれを乗り越えるためには、どのようなことを行うと良いのか、アイデアを出し合ってください。

これから住田先生にご質問に答えていただいた後は、グループで簡単に自己紹介をしていただき、ピンクの紙と青い紙に、それぞれ思った事を書いて下さい。

そして自分の学校の課題解決のために、行いたいと思うことを先程のお話や、これからのお答えも参考にしながら最低１つ書いてください。そして、9グループありますから、最後に各グループ出し合います。そしてどのような意見が出たのか皆様で共有します。これと同じ事を小・中・高と行います。そうすると、小・中・高ともアイデアが各９つ最低出るようになります。それをネットでシェアさせていただき、全国の皆様が見えるようにしよ

うということが、今日の研修会のお土産です。おわかりいただけましたでしょうか。
では、このような形で進めていきたいと思いますので、ご協力よろしくお願いいたします。
それでは、質問を答えていただくための時間を少ないですけど 10 分程とります。

〇住田昌治（横浜市立永田台小学校）

では改めまして、よろしくお願いいたします。さっきお話しできなかった、サスティナブルマップについてひとつお話しします。

ホールスクール・アプローチは、ご存じかもしれませんが、文科省から ESD 推進の手引きが出ています。そこには学校全体で取り組むという内容が書いてありますが、実はそれはそういった事ではなく、学校全体で取り組むのであれば、みんなやっていることになるので、学校全体を対象として取り組むということですね。ですから、授業の中だけではなく、どのようなことが考えられるのかが一番重要な部分です。

これはなにかと言いますと、私は校長として学校を見ていると、先生方はどちらかといえば教室と職員室、または教室と特別教室とそこの間を行き来しているのが多いですよね。ですから、学校全体を見渡すことはあまりないですね。校長や教頭は学校の中をぐるぐる廻っているので学校の中もですが、校舎の周りも大体把握しています。このようないいものがあるとか、ここではこのような良い教育活動をやっているなとか。ということも全部我々は把握しているのですが、先生方はそれぞれ立ち寄ったとこの良さは共有しているのですが、全体の共有は恐らくできていない。どうですか？
では自分の学校のいいところを挙げてみようというと、いくつぐらいありますか？
10 個ぐらいは簡単ですよね。でもこんな事言ったら恥ずかしいなって思うこともあるかもしれません。逆に課題は、多分ありますよね。ここを変えたいや、ここはもっとこのようにしたいな。とか、きっとあると思うのですよね。そういったことを一度オープンにしようということがまず、基にあります。オープンにした時に、自分の学校の良さ、または課題をどんどん出していくとたくさん出てきます。それを思い切ってアンケートをとってみましょう。よく 1 年生が校内探検の時にボードを持って歩きますよね。あれと同じ事を先生達にもしていただきました。先生達にきっといろいろないい所と課題も探してきて、とお願いしました。するといい所も課題もたくさん見つかりました。そして、これを職員室に貼りました。こんないい所ありましたよって、先生達が書いたことをみんなで見たんです。併せて改善点、こういった所は、少し変えた方がいいなって所も、全部見てきました。保護者の方達にも聞きました。永田台小学校のいい所と、そうではない所、どこですか？

っと、書いていただきました。

そしてこれは実は英国の過去のブレアー政権の時に作ったサスティナブルスクールマップ。要するに学校全体がサスティナビリティ、持続可能って考えた時に例えばイギリスでは環境の面や経済の面にすごく力をいれているのが分かります。例えば、自転車のシェア。岡山大学にもありますよね。そういったものを考えたり、風力発電や様々なものがあります。いろいろな人種の人がいるので、いろいろな国の人と協力してやりましょうというのが、この一枚の絵にあらわれています。これを参考にして、私も作ってみました。学校の良さが出てきたので、ラフスケッチをしてみて、例えば学校の中にはこんな所がある。ごみステーションもあるし、池もある。様々な物が学校の中にはあり、これは凄くいいよ。是非これは続けていこうよ。と思うものをラフスケッチしていきました。そして校長室にみんなが空いている時間に来て、一枚の紙にどんどん書き込んでいき、一枚の絵、サスティナブルマップが出来上がりました。

教室の中では今、命の授業や、日韓の交流授業をしていたり、中学生が来て、挨拶運動一緒にしてくれたり、沖縄の学校と交流しているとか、地域の人が手伝ってくれているそういったものが一枚の絵の中に表現されています。この中には、教職員も書かれています。職員室の風景もあり、職員室はいつも先生の笑顔が絶えない。職員会議はこどもの話からまず始めますとか、そういったことが絵の中に１０６項目含まれています。

是非、ユネスコスクールではこういった事をして欲しいなと、僕はいつも呼びかけています。

まずは、サスナビリィティ、学校の良さをみんなで共有し、それを続けていきましょう。どんどんときっと増えていきます。それを追加していきながらこれを１つのルービックとします。学校は今良さを見いだしても、それが続けられているかどうか。人が代わり、先生が代わり、それをずっと持続できるかどうか。これを朝日新聞の社説が取り上げてくれました。やはり先生達大人が良さに気がつかないと、こどもにばかりやれやれっと言っても、中々そういったこと変わりません。子どもが変われば大人も変わると言われる方もいますが、基本的には、大人や授業が変わらないと、子どもは変わりません。つまり先生が変われば子どもも変わります。そうするとやはり環境をきちんと作っていくのは、教師であり、大人の役目です。大人が日常的な生活や、学校の環境を見直したり、学校の良さを見い出しすること。こういったことが大事なのではないかと思います。

これも質問を受けたのですが、どうしてこどもにやらせないのですか？と。先程お話した通り、子どもを変えたいのであれば、まず自分が変わり自分が変容していくことが大事

です。そのようにしながら、段々学校全体を染めていきました。ルービックを作り、サスティナプルマップをもとにして、そういったことが、ずっと行われていますか。例えば、教室や廊下の窓開けて、空気入れ変える、今年は特に教育活動の中にエコの視点を入れていますので、遠足や修学旅行そういう所でもエコの視点を持ってやっています。
ユネスコスクールですから、国連に関する日について学校で取り上げ取り組んでいますか。といったようなことも項目の中に入っています。ユネスコスクールってそういった意味ですね。授業がどうこうではなく、学校全体でそういったことを考えていますか。持続可能性を考えていますか。具体的にというと、いろいろな事が出てくると思います。

そして先程の多忙の話ですが、多忙と多忙感は違うというのは、このアエラの中にも書いています。やはり学校でも越えられない壁はありますよね。越えられない壁を越えていくのは勇気が要ります。中々気持ちの問題だけではできないので、システムを変えていきましょう。学校としてシステムを変えていくことが大事です。デザインとプランの事も書いているのですが、デザインとは何を言っているのかというと、今迄あったものから脱却していくということです。今迄あった印から脱することが、デザイン。なので、授業デザインとなった時に、ただプランニングするのではなく、今迄あったものがどうだったのか、もう一度見直してみて、新しいもの、または今迄と少し構造を変えたものを作り出す。といった意味です。デザインとは本当は、デとザインの間に・（ポチ）が入っている。これがデザイン。かたや恐れないこと、これは私が常に先生に言っていることです。要するに失敗を恐れない。よくトライアンドエラーって言いますが、エラー＆ラン。失敗から学ぶことができる環境を作ってあげることが凄く大事です。
そして、ここに多忙感があります。
多忙感とは、どちらかというと、やり甲斐や生き甲斐を自分で感じていれば、あまり多忙感は感じません。必要だから、やりたくてやるのです。必要じゃないことや、やりたくないことやるので、多忙感を感じてしまいます。多忙ってどちらかというと、物理的なことを解決しないといけないのですが、多忙感というと、学校の取組みや、そういった仕組み、システムを変えていくことによって、変えていくことができると、私は考えています。

明日も学校関係者と少し話をするのですが、教頭との関係があります。要するにミドリーダーをどう育てるかです。それは、私は、はしごアプローチという形で行っています。
はしごアプローチとは、私今年で校長 7 年目ですが、着任当初は先生達が、こういった形でやろうよ、と言うと、どうすればいいんですか？または、他の学校の校長先生は、いろいろな事を指示してくれるので校長にも指示してほしい。要するにマニュアルを示してほ

しいと大変よく言われました。でもそのように行うと、それを聞いた先生は、遂行してノルマにしていくのです。言われたことをする。つまりトップダウンです。これを先生達は結構求めてこられました。そして結局、挑戦をしないので、誰も成長しません。私も成長しない、先生達も成長しない。大事なのは、どうしたいのかということです。じゃあ何がしたいの？と校長から問います。これによって、聞いてきた先生は考えますね。
ぶつぶつ、どうして教えてくれないの？と言いながらでも考えますよね。そしてこういった形でしてみたい、と言ってくるので、こちらは受容し、じゃあやってみようと言います。校長といってもいろいろな教科にマスターではありません。先生方の方がいろいろな事をご存じなので、たくさんのアイデアが出てきます。なので、そのアイデアを受け取る事ができるので私は成長することが出来るのです。先生達も考えてアイデアを持ってきてくれるので、先生達も成長します。挑戦したことに対し、失敗したら失敗から学びますし、うまくいくと賞賛します。そこで意欲が湧きます。そういった関係性を作っていくのです。
指示や命令を行わないことを、サーバントリーダーシップという考え方です。主従を逆転していく。本質的には教室でも同じです。

多分先生達も、こういった風に教えていると思います。ESD は特に子ども達が行ったことをみながら、その築きを大事にしながら授業を作っていくことがあると思いますので、同じサーバントリーダーシップの考え方で、時に主従を逆転して、行っていることもあると思います。

他の先生で、川上にいる人が川下にうつればいいんじゃないの？という考え方の人もいますが、上から流して、下の人が受け取るのではなく、たまには受け取る側にまわったらどうですかね。これは先生達の問題です。いつも子ども達に何でも情報を流す側ではなく、子どもから情報を受け取る側に回ったらどうですか？と。これがサーバントリーダーシップです。

地域との関係ですが、岡山の場合は、公民館と連携しながらされていると思います。これは ESD では大事な所だと思うので、地域に先生達が積極的に出て行くように管理職が仕向けるしかありません。とにかく教室にいつも居なくていいよ。外に出ていいよって言うしかないと思います。やはり、教室の壁・学年の壁・学校の壁がありと、たくさんの壁がありますから、これを一つ一つ低くしていくことが、管理職の大事な役目ですので、それは常に話をしていかないといけないところです。外に出て行けば外の人達も学校の様子が分かりますで、逆に入って来ます。いかにそれぞれの壁を極力低くし、校門も低くして外

との連携を進めていくわけです。そういった事が大事で、これはしつこく何度も言ってきました。以上です。

○ファシリテーター　原　明子

ありがとうございました。参考になったと思います。それでは今のお話を含めまして、先程言いました段取りで、すすめてください。時間は16時に終了予定となっておりまして、全部共有するのに20分かかります。また、皆さんに発表していただいた後、最後に住田先生にアドバイスいただきたいと思います。15時35分を目処に頑張ってみましょう。
後でケント紙をお配りしていきます。皆様、ゴール内容を今一度確認ください。

それでは自己紹介を簡単にしてから始めてください。また、住田先生が各グループを廻っていきますので、アドバイスをほしい事がありましたら、グループ毎に、アドバイスを貰ってください。よろしくお願いします。

（グループで話し合い）中略

○ファシリテーター　原　明子

では、そろそろ発表に移りたいと思います。
出来たグループからケント紙を前に貼ってください。

それでは各グループ、約 1 分程度で発表してください。

○５グループ代表者

5 グループでは結局、ESD は学校の良さを伸ばすことが、つながっていくのではないかという話になりました。各学校によって実態が違いますので各学校の実態に応じた活動をしていこうとなりました。そこで、良さはたくさんあるのに中々見つけられなかったり、十分時間がとれなかったりするので、今一度、学校や地域の良さを子どもや教職員からまず集めます。良さを再確認した上で、さらに続けていける様にしていこうという意見になりました。　以上です。

○９グループ代表者

○○小学校○○マップ

地図を用意しておき ESD に関係すると思うものを子どもに発見させるという活動を考えました。授業ではなく、休み時間に書き込めるように掲示するのはどうかということです。二学期からですと、こども達がすぐに取り組めることを考え、先程もあったように良さを見つけていくことで、気軽に溶け込むことができ、自分の学校の良さ・地域の良さを発見できそういったこどもの心を育てていきたいとまとまりました。以上です。

○４グループ代表者

ESD を通して目指す学校の姿･こどもの姿を明確にしよう。まだまだこれからという学校、ユネスコスクールになってから何年か経っている学校といろいろありますが、まだまだこれからという学校は、何か活動ありきになっているのではない。ずっと続けている学校はこの姿って本当にいいのかな？住田先生のお話をお聞きして、学校の姿ってはっきりしているのかな？このようなことをみんなで話し合いました。以上です。

○６グループ代表者

持続可能な働き方を改善していこう。そのためにも会議ではなく、30 分のワークショップを取り入れてみたらどうかといった話になりました。

負担感を感じながらしている事は続かないと意見が出ました。今日のお話の中で出てきたわくわくする取り組みといったものが、果たして学校の中にあるだろうか？そしてこども達が活動した後に達成感を感じる様な活動ができているのだろうか？といった意見が出

ました。我々教職員もその中でして良かったと本当に心の底から思っているのか？その様なことから、やはり負担を感じながら続けるのは持続可能ではない。30 分間のワークショップが今日のお話の中にもありましたが、それをコツコツと積み重ねることによって、例えば活動計画を見直さないといけないとか、話が出ました。しかし、それはとても大変な取り組みです。大変ですが、それが 30 分間の積み重ねで出来ていくならば、それはとても素晴らしいことで、是非それを学校で取り入れて学校の活動自体を見直す手段として、使えるのではないかといった話になりました。簡単ですが以上です。

○１グループ代表者

１班では、環境づくり。私たち教員が仲良くなり、教員が元気であることが大事ということです。お互い他の学年がしている事を知らないなどといったことがないように、例えば掲示板で発信したり、小さな付箋に今日こういったことをしましたなどと、情報共有ができたらいいなという話が出ました。

ここのポイントは気軽さです。気軽にできるような場所を校長先生に作ってください。今日勉強したので。と言ってみて作ってはどうかという話が出ました。以上です。

○８グループ代表者

発表が始まってから、2 学期からとは、少し違うと思いましたが。

グループ内でお盆閉校日は大変共感しました。負担感を減らす、教職員のリフレッシュのために、そういうことが可能であるのだと話が出ました。

また、2 学期から秋祭りや、地域と密着することが、とても大切です。祭りだけでなく伝統芸能や作物の収穫も、取り入れていくことが大事だと話をしました。

○７グループ代表者

住田先生の話を校長会でしていただく。これが一番ですが、我々下々の者が出来ることとしては、2 学期から活動記録を残していき、次の活動に活きるよう、ファイルするなど、

いつでも閲覧可能な状況にする。職員室にそういった場所を作っていくことになりました。

○３グループ代表者

教職員間の連携という部分では、同様の事を感じられていると思います。コミュニケーションの活性化は大事ですが、ビジョンを共有して持つことで、多忙感が多忙になるのではないかといった意見が出ました。

次に、やることありき、活動ありきになっているのではないかといった意見も出ました。これは、毎年同じ事をルーティンで繰り返しいることを含め本当に必要なのかもう一度見直してみよう。

最後に、これは切実な部分ですが、ESD ってなんだろう？担当者自身が、もやもやしているところがあり、住田先生から持続可能を阻害するものを洗い出したらどうかというアドバイスをいただきました。例えば命を阻害するもの、戦争・いじめ。環境を阻害するもの、戦争・無駄遣い・校内を悪さするもの、そういった阻害するものに注目すると、何をすれば良いのか出てくるのではないかと話になりました。

以上です。

○２グループ代表者

４つ意見が出ました。

① アンケート
② 研修の仕方
③ 実践事例を残す
④ デザインするということ

二学期にできることで、二学期の最初と三学期の終わりに、こども達にアンケートをとり、数値化することで先生もこども達もやる気や楽しさ、達成感を得ることができるのではないかといった意見が出ました。

次にワークショップの仕方も少し変えることで先生方全員の共有もはかるのではないかとなりました。また、実践例も残す事で、人が代わってもでき、児童の実態に添ってできていく。
4 つ目にデザインするということで、年間計画や ESD カレンダーを通して他とのつながりもでき、誰にでもできるプログラムが出来上がるのではないかといった意見も出ました。以上です。

〇ファシリテーター　原　明子
全グループの意見が出ました。それでは住田先生にコメントをいただきたいと思います。よろしくお願いします。

〇住田昌治（横浜市立永田台小学校）
　いろいろお話を伺い、様々な課題や意見があることが分かりました。大事なことは、学校は、子どもが中心となり、子どもが主人公です。これは誰しも否定することではありません。ですが、こどもの為だと先生達は、とても頑張らないといけないのかとなります。そこが少し「？」です。子どもが主人公なのは分かりますが、その子どもを育てている先生達が元気でないといけません。
　先生達が幸せでなければ、子ども達は幸せにはなれません。先程も言った様に、職員室が良くならないと教室が良くなるわけがないのです。だから、いい職員室をつくるのです。これは管理職の務めです。今見ていると先生方は、意識をして学校に目を向け、こどもの姿を見る。こういったことはすごく有り難いと思います。

　実は提出し忘れた資料がここにございます。私は、教育新聞で ESD の魅力という連載をしています。学校の HP にも掲載していますので、ご覧ください。
　先程後ろの方で持続可能性話についてお話が出ましたが、実はこれに書いてありますので、読みます。
「まず持続可能性の問題を自分事として考えてみる。例えば東日本大震災や熊本地震の被害の大きさを見て、防災や減災について考えるようになったり、地域のつながりを見直し始めたりしたことだ。病気を患っている人は、病気や医療や薬等について考えるかもしれない。高齢化や認知症、介護についても切実だと思う。仕事に行き詰まっている人は今抱えている問題解決について考える。もしかすると仕事を続けるかどうか迷っているかしれ

ません。いじめに苦しんでいる人は、明日から学校や職場に行くかどうか悩んでいるかもしれません。季節外れの暑さの中で潮干狩りに行って熱中症にかかって生死をさまよった方は、温暖化や日よけ・水分補給について考えたかもしれません。プラスチックゴミや手つかずで捨てられる食品の多さを見て、生産や消費の問題に目を向けている人もいるかもしれません。数え切れない程起こる日々様々な出来事は、持続可能性に関わる問題です。
学校ではどうでしょう。職場ではどうでしょう。家庭ではどうでしょう。地域ではどうでしょう。私や私たちの持続可能性を阻害しているものは何でしょうか。地球の持続可能性を阻害しているのは何でしょうか。まず考えてみましょう。」

持続可能性に関わって、自分達の日常を見直す時間から、世界が変わっていくことを最初に訴えたかったので、このように書きました。

次に、「学校を元気にする ESD」を書いています。先程お話した AERA なんですけど、多忙・多忙感解消で、ESD に 10 年取り組んできました。問題は、長時間働いても、自己肯定感や充実感が教職員にない。子どもは大人の姿を見て育ちますから、それは重要な問題です。先生達がすごく遅くまで仕事をしていても、伝わっている感じがしない。職員室の在り方はそのまま教室の在り方に繋がっていきます。学校運営においては、「先生元気化プロジェクト」というのを 15 年度から実施しています。教師自身が日頃感じている課題を洗い出す。学年便りと学校便りの統合。成績の通知表、あゆみを簡素化しています。通知表の内容は学校で決めて良いのです。だから今私の学校、中学校ブロックでは、通知表は止めて、大事なことだけを伝えるようにしています。出席日数も止めました。これは誤記載のためです。出席日数を一日間違えただけで大変なことになってしまいます。簡素化することによって先生達の精神的負担も解消していきます。今は、少し間違えるだけで、新聞に載ってしまうのです。それは後々大変です。ESD だと言いながら、せっかくの地域との交流が台無しになり、学校は何だといったことになってしまいます。
そして、１２の課題に取り組みました。
ここで大事なのは、ボトムアップです。定時に校長が先生達に帰りなさいと言っても、校長がいると帰りにくいと思います。なので、先生達に課題を洗い出して、働き方をこのように変えましょうと提案してもらい実践しています。

先程お話ししました、はしごアプローチです。今年の 4 月から、職員室に校長の机を無くし、職員室の一角にカフェコーナーを作りましたところ、教職員達の会話が増え、先生達が明るくなりました。現場にどれだけ任せ、見守れるか。そこに校長の力量が問われていると思います。

最後にもみじアプローチについてもう少し説明させてください。
先程お話しした中のホールスクール・アプローチはもみじアプローチとも言って、段々と染めていきたいと言いましたが、持続可能性は無意識でしていますし、一生懸命皆さんされていますから、止めようとか変えようという必要は本当はないからです。しかし、一生懸命してきたのに、どうして地球環境はこんなに壊れるの？とよく言われます。知らず知らずの内に我々は、持続可能性を阻害するような教育をしてきていることを、見直さないといけません。一回立ち止まり、今迄してきたことは、持続可能性を阻害しているのかと考えなければいけません。自分達がしていることは、持続可能な未来・社会、未来のなり手のために進めているんだと、意識を持ちながら進めていきましょう。

一番難しいのが、意識改革・意識変革です。これは、今迄ＥＳＤをしたことがない人が、やろうとした時に、最初に戸惑います。「今迄してきたことがなぜ悪い？どうしてＥＳＤをしないといけないのか？」と意識を変える事は、難しいです。日常生活を見直す時間が生まれてくれば、私達が行っていることが、ＥＳＤに繋がっていることが分かります。

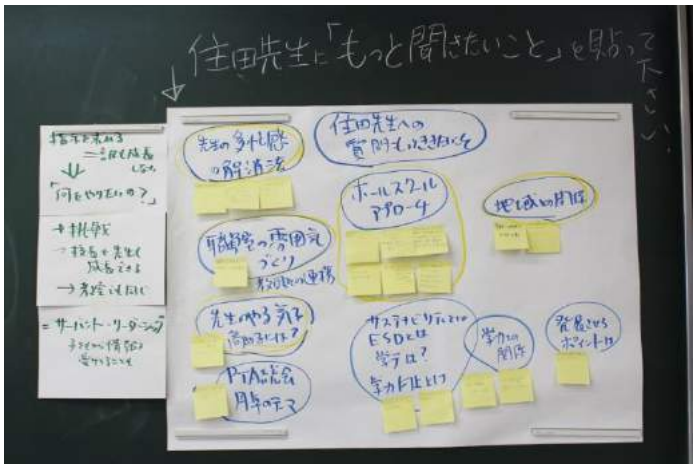
教育には、環境教育・国際教育と様々な教育があります。そういったことを通してＥＳＤをしている所もあります。これは悪いことではありませんが、間違ってはいけないことは、世界遺産教育しているからＥＳＤをしていると、言い切ってはいけません。それは、そういった団体がしているのです。「教科の中でも、ＥＳＤや持続可能性入れています、総合の中でも入れています。」大体の学校がここで終わりがちなのです。そうなると、ＥＳＤが求めていたものは、価値の変容・行動の変容・ライフスタイルの変容です。生活様式まで変えていかないと、持続可能にしていくことができません。ということは、ここで終わりにしないで、学校で学んだことが価値変容まで、深まり、高まっていくのです。学校や授業で学んだことは、学校を離れてもしているのでしょうか。水の大切さを学んで、台所の水の出しっ放しダメですね。電気やエネルギーを大事だと言いながら、電気の付けっぱなしもダメですね。学校全体を見た時にどうですか？ゴミの分別と言いながら、先生達ゴミを山のように出していませんか？これもダメですね。先生達が備品を教室の中にいろいろ抱え込み、学期末にまとめて戻しに来るので、こちらは、あることを知らずに買ってしまったり。と無駄なことです。経済的な面でも問題ですね。

学校における課題を取り組んでいくことは、授業や学校の中で教えたＥＳＤが、学校の中でも行き着いていきます。どこを切ってもＥＳＤですか？といったことです。学校でできても、地域や家庭でできていますか？といったことが、地域の課題です。地域の課題となった時に、学校で学んだことを地域でもしていますか？

また、地域自体の課題もありますね。世界ではユースが頑張って活躍していますが、小学生もそうです、地域に向き合って、地域の人と一緒に課題解決まですることが、ホールスクールアプローチです。そこまで出来ると、非常に魅力的になるわけです。

こどもの力によって、地域が変わり、活性化していきます。そうすると地域の人達は、学校に協力をしていただけるようになり、学校の評判は益々よくなり、好循環につながります。しかし逆に行うと、悪循環で学校は疲弊していきます。ホールスクールアプローチは、もみじアプローチやＥＳＤを使いながら学校運営をしていくことによって、地域の中の核として、しっかりと位置付いていき、地域から見ても、学校は非常にいい意味の存在になると思います。なので、時系列で考えますと、段階です。

環境教育をしているから、ＥＳＤではありません。環境教育をしている時もあります。対象がどんどん広がっていくのが、ＥＳＤの魅力です。これによって、こども達の変容が生まれてきます。価値の変容がなければ、総合学習の意味がありません。何か出来ました。何かであれば、ＥＳＤである必要はないのです。教科学習をすればいいのです。価値の変容が生まれるからＥＳＤです。価値を変容させる事が今すごく大切だと言われています。ユネスコスクールは、使命とまでは言いませんが、そういった役割を担っているのです。



決して出来ない話ではありません。必ず出来ます。先生達はこども達を信じて、私は先生達を信じて。どんどんしていくと、実現可能です。ですから、ストップをかけないでください。こどもの気づきの方が高いです。効率や素早いといったことを求めるのではなく、今迄そぎ落とされてきた気付き・つぶやき・感性・思いつき、そういったことを含めて育てていくことが、持続可能な未来への近道になると思います。以上です。

○ファシリテーター　原　明子（岡山市　ESD コーディネーター）

ありがとうございました。通知表をやめてしまうなんて、衝撃的でした。永田台小学校の行い方は非常に新しく斬新だと思いました。住田先生、皆様ありがとうございました。

【中学校分科会】

〇ファシリテーター　岡本弥彦　（岡山理科大学）

最初に戸水先生への質問事項を書かれている方は提出ください。
それでは、これから中学校分科会を始めます。全体のご案内にもありますように、ESD を学校現場で持続発展させるために、「2 学期から使えるアイデア集づくり」といったワークショップを行います。まずは、先生方お一人 30 秒以内で簡単に自己紹介をお願いします。私は、司会を担当します岡山理科大学　岡本と申します。よろしくお願いします。

（参加者 自己紹介　中略）

〇ファシリテーター　岡本弥彦

ありがとうございました。中学校分科会ですので、中学校の先生が多いと思いますが、その他いろいろな立場の方もいらっしゃると思います。といったことで、この後のワークショップが盛り上がればと思います。ワークショップに入る前に、戸水先生に質問にお答えいただきたいと思います。よろしくお願いします。

〇戸水　吉信（金沢大学附属中学校）

改めまして、石川県金沢大学付属中学校より参りました戸水と申します。
本校では研究主任に仰せつかっており、3 年目になります。本日は私も勉強させていただく気持ちで参りました。先生方の学校での実践、また同じような悩みを抱えている先生方もおられると思いますので、一緒に学ばせていただけたらと思っております。本日はよろしくお願いいたします。

では、いただきました質問事項を順番に答えさせていただきます。先程、総合学習が中心ではないと発表させていただいたことで、「総合 ESD になっていないのは不思議だ」といった質問がありました。言葉足らずで申し訳ありませんでしたが、していない訳ではありません。金沢には、金沢に関する個別追求学習があります。昨年も三年生は学校で ESD をしているので、金沢の中にみる ESD を学ぶために文化の継承や環境のことでも、そういった視点を取り入れて個別課題研究を行いました。また今年は、金沢の十年後を想像しようという取り組みを行い、商工会議所の方に来ていただき、提案いたしました。この提案する中で英語でのプレゼンが出来る人は英語でしてみようと、ハードルを上げて、2，3 人

発表しました。隣の付属高校が SGH の指定を受けているので、付属高校からも先生が英語のスピーチを聞きに来られたりもしました。ですから、総合学習をしていない訳ではありません。今年の研究授業は教科とのつながりが多かったですが、こういった総合学習とのつながりも出来ています。また、シラバスや道徳とのつながりもありますが、道徳の年間指導計画の中には ESD との関連欄もあり、道徳で ESD を行うことを計画にも入れています。

「ユニットの授業にあてはまるものがあってもシラバスとの関係は？」といった質問についてですが、年間指導計画で順番の組み替えをしている教科もあります。我々はお茶を飲む所をお茶場と呼んでいるのですが、そこに年間指導計画を掲示しています。それを見ながら全体の中で ESD に関わる所を特にハイライトして、実践させていただいているところです。

学校経営に ESD を発揮しているかという事ですが、委員会活動、特に生徒会との委員会活動が関係あると思います。

家庭の環境についてですが、グリーンカーテンを作っています。私も実は、JRC というエコキャップ回収に参加しています。生徒も自分達でできる所から各委員会で考えています。

「経営計画全体に関して、学校全体で ESD をしているか？」との質問については、これは目に見える形では、ないと思います。しかし、本校はトップダウンのやり方ではなく、下の方から先生達の意見を吸い上げようといったやり方ですので、もしかすると先生達の方でもっと経営計画に掲載した方が良いといった意見が挙がれば、変わる可能性はあると思います。

最後に「深い次元での生徒の変容を実感した場面・ポイント」についてですが、教科レベルで行っているので、教科の中で変容があったかどうかといった質問かなと思います。私が変容を感じたことは、能のユニットです。生徒が明らかに 3 年前とは、能を見る姿勢が違います。3 年前は、事前学習をしたにも関わらず、申し訳ないですが、寝ている生徒もたくさんいました。今年は「寝るなよ」といったマイナスの声かけではなく、どういった視点で見るかといった点に気をつけることにより、堪能できたといった意見もあり、実感できたと思います。後は教科レベルでこれから検証していきたいと思います。

○ファシリテーター　岡本弥彦

ありがとうございます。戸水先生には、全体のワークショップの後に、再度お話いただ

きたいと思います。それではこの後のワークショップの進め方について説明します。
最終的には、「ESD を 2 学期から使えるアイデア集」を作るために、ポイントを皆さんでまとめましょう。課題に対しては、対応策を出してください。その後、共有したいので、各班 3 分ずつ発表をしていただきます。では、グループで協議ください。

（グループでの話し合い）　中略

○ファシリテーター　岡本弥彦

それでは、これから各班、発表をしていただきたいと思います。

○１班代表者

小中高と実践をお聞きして、やはり意識の問題が大事ではないかといった意見が出ました。ESD 持続可能な社会を作る、そのためには何が必要なのか？学校の勉強や、教師は何のためにあるのか？教師自体の価値観や意識を変えていくべきじゃないかといった意見が出ました。そういった意識を持って、授業・教科指導を改善することが大事です。もちろん総合も大事ですけど、教科を問わず、生徒に一番エネルギーを注いでいるのは、授業なので、授業の中でそういった視点で改善できるかといったことだと思います。やはり実践ありきで、自分の担当教科が核となり、他教科と関連のある、戸水先生にお話いただいた

ように、プログラムにならないにしても、まずやってみることが、できるようになれば良いと思います。

○２班代表者

私たちの班では、ESD が新しいことでも、ハードルが高いものでもなく、日々の教科指導の中で、ESD の視点で見ると考えられるものが幾らでもあるのではないか？このことが大事ではないかといった意見が出ました。

改めて ESD だからこれに取り組むとかではなく、単発的な事を一生懸命取り組むことも大切ですが、日々のことの方が重要だと思いました。

実際にこれからどうしていくべきかについては、情報発信の場所が非常に大事だと思います。先程、週刊マイベストについて伺いましたが、先生達が行っていることを先生達から発信していく、そういった情報交換が必要であり、総合学習だけでなく、教科間のつながりも考えていった方が良い。そのためにも、職員会議やそういった場、お茶を飲みながらでも話をして情報発信をしていくことが必要だと思います。実際に生徒達への具体的な手立てをどうするのか？といったことですが、しっかりとしたカリキュラムを作っていく必要があるのではないかと思います。そのためにも、ESD カレンダーがありますので、日々のことを積み重ねながら、一つずつ作り上げていく方向になればよいといった話になりました。

○３班代表者

一枚目ですが、まず課題としては、ESD 導入そのものが「**Education for Sustainable Development**」と日本語訳ともに、言葉が難しいことがあり、また同時に ESD は特別なもの・特別感があるから、何か特別なことをしないといけないといったことが導入の段階からあったと思います。

ESD のために何かするのではなく、予算組みでも ESD のために、ESD 予算を組むのではなく、例えば国語の授業で外部講師を呼ぶので、外部講師のための謝礼をください。それを各学校ユネスコ ESD があるので、そちらから出しましょうとあくまで裏にしていく。続いて二枚目です。では、実際に ESD をカリキュラムでしようと思うと、行事があり、ESD のために○○○をしよう。その次に授業があるけども、ESD を○○○でしよう。と、教科と勘違いをして、そのためだけに限られた時間と人とエネルギーとを ESD のために全部特別な形で投入しようとするので、みんな大変になり、疲れると思います。ですから ESD を

振り返るとESDがありましたといっただけなので、今、各グループが発表されている多様な意見があり、例えばそれぞれ学校の代表としての自分の意見には責任を持ち、そしてそれを皆さんに分かり易く伝えるために、図解でイメージをもって伝える、これがコミュニケーションの力だと思います。

でもそれが全て絶対に正しいという訳ではないので、自分の学校に取り込める所は取り込む、そうでないところは、違うと思ってください。ESDのためにと、ここでプレゼンテーションしてしまうと、ESDは特別なものだと思ってしまうので、ESDの言葉が分かれば分かるほど、説明は小学生にも出来ると思います。カリキュラムの中で、振り返れば、ESDがそこにあると思います。

三枚目ですが、ESDを学校に浸透させるために、とにかく最初は超スーパーハイテンションで、核となる人が進めていかないと根付きません。

例えば飛行機を飛ばそうとしますと、時速を何百キロにずっと加速し続けなければなりません。飛行機も決心速度といった言葉があり、三キロくらいの所を飛ばそうとすると、すごいエネルギーが要ります。しかしある一定のエネルギー量になると、空気の抵抗がプラスになり、上空に飛んでいきます。そのためには、膨大な人とエネルギーと時間がずっと要ります。その時には、周知をして発展させていく。でも恐いことが、例えば部活動ですと、名監督や部活に大変熱心な人がいなくなると、突然チームが弱くなります。テンションがダウンしていき、本来続けないといけないことが、続けられなくなります。

そうならないためには、ステージAでは、周知するには、エネルギー・予算・時間が要ります。

次にステージBで、ESDのためにするのではなく、ESDを手段として使ってみてください。例えば国語の授業をするのであれば、先程の能の話でもありました、能であり、音楽であり、美術であり、ESDという手段で捉えてください。つまりテンションを最初さほど高くなく、探るくらいでいいと思います。

ステージCで最終的なもの、空気となっていく。これは道徳と一緒だと思います。道徳も今は教科型と言われていますが、学校の教育は道徳が朝の会、給食の時間、また皆さんも授業中に問題発言があれば、授業を中断して、発言の指導をされていると思います。つまり道徳が特別なものではなく、あくまで学校のカリキュラム、普通のことと一緒なので、継続しようと思えば道徳と同じ様な成り立ちで、空気のように、道徳的なこういったことは大切だよ。とか、そういった考え方は幸せではなく、次の世代の人達のことも考えないといけないから、ESDという言葉を使わなくても、ESDの考え方を生徒に伝えていく。そ

れがポイントだと思います。

○４班代表者

時間内に意見がまとまらなかったので、一人ずつ発表させていただきます。

・今日３人の先生方のお話を聞かせていただいて、やはりリーダーシップを持った先生がある程度の期間、計画を取り組む、特に永田台小学校の住田校長先生の発表は素晴らしいと思いました。そういったリーダーシップを発揮できるような中心となる先生が必要だと思います。また、ESD を少し難しく考えていました。もっと柔軟に教育計画、教育目標、重点目標そういった中に ESD の視点を入れて、全体で取り組めるようなもの、来年度の教育目標を１１、１２月頃から考えると思いますが、ESD の視点と、先生方の意見を入れながら作ることが出来たらいいと思いました。今まで、型にはまっていたところもあったので、自由な発想ができたらいいなと感じました。

・今日の発表で教科間に繋がるといったことが素晴らしいと思いました。これを持ち帰り提案しても、抵抗感が出るのではないかと思いますので、いろいろなみんなが見えるところに、さりげなく年間計画を掲示し、繋がるところを探していくことから、実践できるのではないかと思います。

・戸水先生も言われていましたが、ESD を始める前から個人同士のつながりが教科間であったことが、大変羨ましいと思いました。現在繋がっていない訳ではないですが、自分から少しずつ広めていき、全体に広まればいいなと思います。

・我が校はユネスコスクール指定校になるかもしれないといったことで、緊張しております。また本日、勉強する機会を与えていただき、参加出来て良かったです。教科間のつながりといったことが、大変印象に残りました。今日学んだことを、学校に持ち帰り、誰に言ったらよいのだろう？といった思いが正直ありますが、まず管理職に話をし、ESD 担当の先生にも伝え、そこからつながりの話ができるような事を提案していただけるようにしたいと思います。また、金沢大学のカリキュラム表もいただいたので、各教科主任と話をするところから、まず始めてみようと思います。

○ファシリテーター　岡本弥彦

先生方ありがとうございました。短時間でしたが、それぞれのグループでいろいろな場面的なお話をしていただけたと思います。
それでは最後にまとめを行いたいと思いますので、戸水先生お願いします。

○戸水吉信（金沢大学附属中学校）

今日は私も大変勉強をさせていただきました。ありがとうございました。
一つ言い忘れたことがありまして、先程何人かの先生の発表にもありました、「ESD の視点」についてですが、この言葉を我が校でも使うようになってから、ESD の見方で新しいことを始めたり、見ていく様になり大事な言葉だと思います。
どのように広めるかといったことについては、生徒が楽しそう、先生が楽しそうでないと広がらないと思います。リーダーシップをとってしていただいている先生は実感されていると思います。

実は、私は職員室でうるさいんです。「あんな授業をした」、「こんなことがあった」、「授業をして生徒が喜んだので、その姿を見て、私も嬉しかった」などと、職員室に戻ってから話をします。話を聞いてくれる職場ですし、私だけではなく、他の先生も同じように話をします。そして、それを聞いた他の先生方もやってみようといった雰囲気になっていると思いますし、そういったことが大事だと思います。

あと、教科としてする時の注意点ですが、ESD の英語科の先生で、貧困を扱った授業を行い、生徒に英語で感想を提出させたことがありました。私は「すごいですね。これは ESD カリキュラムマップに掲載しましょう」と提案しましたが、先生からは「生徒が感想を書いたからといって、貧困問題が解消されるわけではないので、掲載できない」と言われました。私はそれは違うと思い、「英語科として力をつけたいと思い、題材に貧困を扱ったので、これはこれで良いじゃないか。」と言いましたが、頑なに拒否されたことがありました。ESD の問題を教科で解決しないといけないと言われましたが、それだとハードルが高すぎると思います。題材として扱ったことで、良いじゃないかと思います。これでそういった輪が広がればよいと思います。逆にいくら ESD に関わることだとしても、教科の本質を外れているとそれは違うと思います。そういった注意点も大事だと思います。参考にしていただければと思います。

今日はたくさんの先生方のお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

○ファシリテーター　岡本弥彦

戸水先生ありがとうございました。大体予定の時間になりました。私は大学の教員ですから、実践というより、実用的な研究をずっとしておりますが、今日この分科会に参加させていただいて、常日頃思っていたことが、整理できましたし、新しい発見もありました。最後に、私が気づいたことを２，３点申し上げたいと思います。

まず、先生方いかがでしたでしょうか？ESD に取り組まれている先生方はワークショップ形式の研修会に慣れていらっしゃる先生も多いかもしれませんし、初めて参加される方もいらっしゃるかもしれません。講師の先生の話を聞くだけで学校に持ち帰り、他の先生に伝えることは中々難しいと思いますが、こういったみなさんで意見を出し合うワークショップ形式はいいと思います。みなさん実感されたと思います。これも一つの ESD 的な手法だと思います。

今日の戸水先生や、他の学校の先生方のお話の中にもありましたが、学校の中でいろいろ建設的な意見を交わし、コミュニケーションをとっていくことは大切だと思います。学校外の研修や校内研修でも、ワークショップ形式を取り入れていただけると、それ自体で ESD 的なものの見方を味わえるでしょうし、カリキュラム編成の話でも、学校面のプラスにもなると思います。更にこれからアクティブラーニング、生徒の授業の中にもこういった形式を取り入れいくことができると思います。

私も一週間前に当大学で教員のための、教員講習がありました。多くの先生が来られ、私も ESD の話をしました。３時間受け持ちましたが、私は５０分くらいしか話をしていません。最初に講義した後に今回同様、ワークショップを行い、発表をしてもらいました。アンケートを提出してもらいましたが、みなさん良いことを書かれていました。これを私が２時間ぐらい話していると、どうだったでしょうか。もしかすると寝てしまう方もいるかもしれませんし、アンケートにも良いことばかりではなかったと思います。これは主体的です。次の指導要項を見てもキーワードは、主体的、協同的です。まさしくこのスタイルは、いろいろな研修でもありますし、生徒の学習方法でもとてもいい事だと思います。そういった意味でも今日はとても素晴らしい研修だったと思います。

それから今日は中学校分科会といったこともあり、教科連携の話がよく出ました。
私も小中高といろいろな実践を拝見しておりますが小学校は総合的な学習を軸に、教科を付けていこうといったパターンが多いです。
中学校はそれではやりにくい部分もありますので、教科を軸に最初は理科と家庭科が担当し、そして段々と輪が広がり、英語の先生、美術の先生と、教科連携をとりながら全体が盛り上がった段階で整理をし、総合を入れていくパターンをよく拝見します。今日は、これらにもいいヒントになったのではないかと思います。

最後に宣伝になりますが、戸水先生にもご紹介いただきました、国立教育政策研究所の「ESD の学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」といったリーフレットがあります。先生方はご存じだと思いますが、もしも、ご存じない方がいらっしゃいましたら、国研の HP に掲載されていますので、アクセスしてみてください。
また、本日ご案内がありました、教材のつながり、人のつながり、能力・態度のつながりといった三つのつながりについても詳しく書かれています。さらに、戸水先生のお話にもありました、七つの能力タイプ、六つの視点は国研のリーフレットにも記載がありますが、環境省の HP に「環境省のこども環境白書」にも掲載されています。小学校高学年向けに書かれていますので、国研のリーフレットの枠組みがこどもにも分かるよう書かれています。

こういった資料もありますので、是非参考にしていただけたらと思いますし、このような機会を利用いただき、今後各学校での ESD の推進とともに、全体を共有し合い、ESD の大きな目標に向かって協力していけたらと思います。また来年度以降もぜひご参加ください。

戸水先生、本日はいろいろな視点からお話いただき、ありがとうございました。
以上でこの分科会を終わります。

【高校分科会】

○ファシリテーター　柴川弘子（岡山大学大学院教育学研究科 ESD 協働推進室）

それでは高校分科会の方を始めさせて頂きます。ファシリテーターは、岡山大学大学院教育学研究科の ESD 協働推進室コーディネーターの柴川弘子です。よろしくお願いします。今日は広島から永尾先生にお越し頂き、大変内容の濃いご発表を頂き、もっと聞いてみたいということもありましたが、今日のワークショップの中で、「二学期からできる！ESD のアイデア集作り」に取り組んでみたいと思っています。

最終的にはこのようなケント紙を用意しています。先生がたの発表の中でも、「こういう時、こうしたら良かった」「こんな時、こう考えた」という様々なアイデアがあったと思います。それらに加えて、私たちがそれぞれの学校で抱えている課題があると思いますので、皆で深めていってアイデアを出し合ったものを更に加えていき、アイデア集を作っていく。それをウェブサイトにも紹介したいと思っていますが、ウェブサイトは二学期には間に合わない可能性がありますので、これらを貼りだしていき、それを写真に撮って帰っていったらそれを同僚に広めたり、研修などで使えるようなアイデア集を作りたいと思います。

そこで、まず最初に参加者の皆さんに、簡単に自己紹介をして頂きたいと思います。その際に、先程の永尾先生の報告について質問がありましたら、すぐに答えられる範囲でではありますが、その場で出して頂き、自己紹介の最後に永尾先生にまとめてコメント頂くという形にさせて下さい。また、最初に配布したポストイットがありますが、黄色のポストイットに聞ききれなかったことがあれば書いて頂けると、また後日永尾先生に私の方から送るということも出来ますので、今は自己紹介とひとつの質問に限ってお願いします。

○参加者 A

永尾先生、ありがとうございました。一番関心を持ったのは放送部で番組を作ることと、英字新聞を作ることです。以前に私も英字新聞を作ろうと思いましたが、もう全然構想が違っていまして、A3 の二つ折りぐらいで作ったことはありましたが、こんなに立派なものは初めてみました。本当に感激しました。ありがとうございました。また放送部のことでお聞きしたいと思います。

○参加者 B

よろしくお願いいたします。うちはスーパーグローバルハイスクールの指定を受けていて、

先生のお話しにもありましたように、やらざるを得ないような状況になりまして、よく気持ちが分かりました。今、頭が痛いのは、課題研究のプレゼンテーションで、生徒は課題研究で来週から 10 日間ほどカンボジアに出向いてプレゼンテーションを行うんですが、今日はその準備をしているところです。色々と課題があって悩ましいところなのですが、どうぞよろしくお願いいたします。

○参加者 C

こんにちは。本校もユネスコスクールに指定されていますので、本日はとても楽しみにしてきました。早速使えそうだなと思ったのは、クロスアートで、今年はアートマイルという企画がありまして、やり取りをするチャンスがありますので、是非参考にさせて頂きたいと思いました。質問したいのは、英字新聞です。やはり私もトライしたことはあるんですが、「手間をかけない」というところが、全然合点がいかなくて、「めちゃ手間ですよね？」と思うんですが。その辺りの仕組みを教えて頂ければと思います。

○参加者 D

先生の取り組み、すごいなあと思ってお聞きしていたんですが、総学の担当をされていて、私も本年度から主担当になっているのですが、大変だから、仲間が全然増えません。で、「誰かやろうよ」と言うんですけど、「えー、見てて大変だから絶対嫌」と言われて 1 人でやっている状態です。先生の学校はある程度組織化してされているのでしょうか。教えて下さい。

○参加者 E

本校はユネスコスクールに認定されて二年目の学校です。まだ取組みにかかったばかりです。更に今年は国際バカロレアの認定校となりまして、ますますこういった方面が大変になってくる学校ではあります。今日の先生のご発表は素晴らしくて、どこまでうちの学校が真似できるかと思いまして、感心するばかりでした。お聞きしたいのは、ACTI は総合学習の時間でされているということですが、これは週何単位でされているものなのでしょうか。さらにそれを四期に分けられていて、四期の中の 1 つがペンパルアクティビティ。これはどれだけ時間を取っていらっしゃるのかなと。そういうカリキュラムの細かいところもお聞きしたいかなと思いました。教員の負担が無いようにと言われていましたが、負担が無いわけがないのではと思います。ユネスコスクールでは皆教員は負担に思っていま

すので。慣れないことなので、何をしたら良いのか分からないということが大きいんですね。また後程よろしくお願いします。

○参加者 F

今日の先生のご発表はすごく分かりやすくて、おっしゃっていることはすごすぎてすぐには真似できないんですが、提示の仕方もすごく入ってくる感じで工夫されていたので勉強になりました。ありがとうございます。私たちの学校は、皆さんそれぞれに指定があったりする学校なんですが、正直今日は校長から行ってくるように言われて、勉強させてもらいにきているので、私どもの方は素地が出来ていないところをこれから、という段階になっています。ものすごく基本的で申し訳ないんですが、質問は「そもそもユネスコスクールというのは他の学校とどう違うのか。ユネスコスクールを一言で説明するなら、どう説明したらよいのか」というのを教えて下さい。

○参加者 G

先ほどは非常に聞きごたえのある発表を聞かせて頂き、ありがとうございました。私もこの春から本校に赴任して、日が浅いのですが、今日は勉強させてもらおうと思いやってまいりました。先ほどの発表の中で、総合学習とからめてされているということですが、やはり特別に時間を取ることは難しいということなので、やはりそういうものと絡めてやっていくべきなのかと思ったり、今回はそういった辺りを質問してみたいと思います。よろしくお願いいたします。

○永尾和子（広島井口高等学校）

まず、推進体制ですが、最初は教育企画部というところがありまして、そこが担当していました。ですが、教育企画部を解体することになり、その中で持っていたのが、学校評価、授業評価、総合学習で、新たに始める時は、教育企画部が、ということだったんですが、それから視聴覚もあったかな。とにかく、教育企画部を無くすと。それが進路、教務、というそれぞれ関係のところへ振ったんですが、総合学習だけはどこも取りませんでした。案の定。それで校長とも相談して、とりあえず、プロジェクトとして置こうということで、ACT プロジェクトというのがその時に出来たんです。1 年やってみて非常に居心地が良い。最初 6 人いて、今は 5 人ですが、その ACT プロジェクトでするのが非常にやりやすくて、そこで校長とも相談して、どこかに振っても上手くいかないだろうから、これはこれで独

立したプロジェクトとして残そうという話になりました。今は総務や教務と並ぶ、「部」はありませんが、独立した分掌としてあります。チームリーダーと呼びますが、プロジェクトリーダーが 1 人。あとは、1 年担当、2 年の理系担当、文系担当、そして私が全体の相談役という形で今いる。二年前までは、チームリーダーをしていました。そういう形で、非常に慣れているので、動きやすい。そういう体制が生まれているのです。割と好きな人っていますよ。そういうプロジェクトを動かしたり、企画したり。そういう人をピックアップして、動かして、チームを作っていく。

あと、しんどいです。楽ではないです。でも、生徒が上がるので、進路でその生徒を見た時、顔を見たら嬉しくなりますよね。それから生徒のバイリンガルプレゼンテーションの決勝大会は素晴らしいです。3 月にありますので、是非見に来て下さい。決勝大会では各分科会のチームから 1 人が選ばれて競うんですけれども、予選のときはまだまだですが、決勝の時は素晴らしいので、そういうので生徒の満足げな顔をみると、やはりやって良かったなと思うし。今日は時間が無くて話せていないのですが、お手元に実践記録があると思います。あれは今年の 3 月に作ったもので、毎年作ります。これがあれば、誰がなっても出来ます。そこの中に基本理念から年間計画から、1 時間ごとの指導案、評価項目も含めて。生徒に配るワークシート。

そして ACT 通信。全てが入っています。ACT 通信は出す度に教員全員のメールボックスに入れるようにしています。今 ACT が何をしているかというのを教えるために入れます。実践記録はだいたい同じようですが、毎年違いがるので必ず作る。ACTI ワンで 1 冊、ACTI ツーの文系で 1 冊、ACTI ツーの理系で一冊。二年生から文系理系に分かれるので、それぞれで ACTI をやっています。毎年 3 冊作って、全員に配る。これは、「紙が無駄じゃないか」という声も聞こえてきますが、「いいや、これは作らなければいかん」と。必ず作っています。正直言うと、一番最初は全部私が書きました。1 年間かけて、1 時間 1 時間、いっぺんに書くわけではないので、作っていきました。1 年目は 1 年生の ACTI ワンから始めたので、1 年生のを作りました。2 年目は次の新しい担当にそれを渡して、これを見ながらとにかくやってくれという。2 年目は ACTI ツーの文系のを作りました。指導案を作っていきました。それで一旦出来上がると、皆がそれを見ながら、ちゃんとその年によって作り替えていってやってくれるので、そこが楽なんですね。元があるから。ひとりで作るのは大変ですから、どこかでチームでも何でもいいですが、やはりどこかではそういうものが必要だと思います。皆で協力して指導案を作っていけば、あとが楽です。本当に。それで続くのだというふうに私は思っています。

単位数ですが、3 年生では受験勉強をやっていたので、校長もこれはいかんと。私も絶対にこれはいけないと思って、1 年目に声を大きくして「これはやってはいけませんよ」と言っていたんですが、全然聞く耳持たなかったので、カリキュラムから消しました。否応なく 3 年の ACTI はやめて、2 年にその単位を持っていきました。だから 2 年生は 2 時間あるので、出来るのです。1 回、2 年生 1 時間でやってみたら、生徒は本当に忙しくて、放課後や家でやらなければ本当に追いつかないんですよ。それで、2 年生が 2 時間になって、余裕が出来た。それでうちは 1 年生 1 時間、2 年生 2 時間でやっています。これが一番やりやすいと思います。

○ファシリテーター　柴川弘子

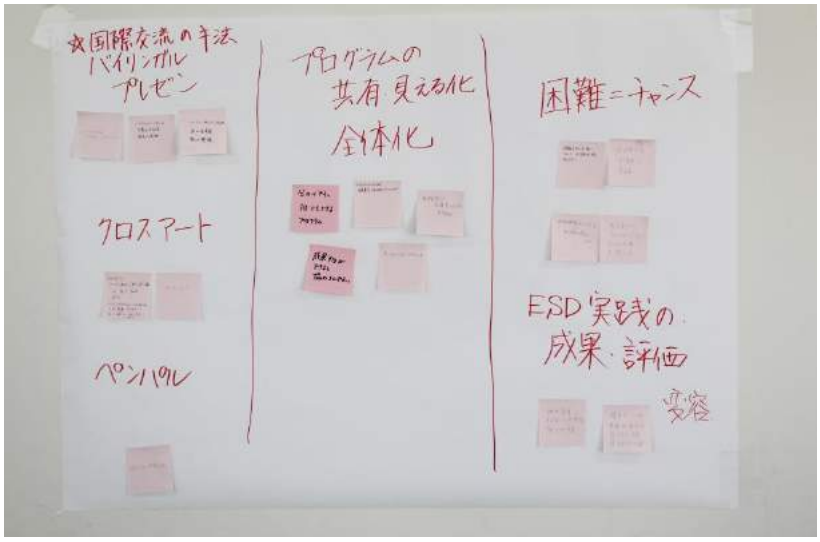
では、これから今日の流れを説明したいと思います。ポストイットを模造紙に貼りだしていきましょう。最初はグループトークにする予定でしたが、人数も少ないので、こちらに全員のものを貼りだしていきます。ピンクの方には、今日の先生のお話を聞いてポイントだと思った点。ブルーの方には、自分の現場の課題について。私も以前に教員をしていたことがありますが、先生の話を聞いていて改めて、ああいうことが課題だったなというのを認識しました。最後に時間があれば、ということになりますが、黄色の方には先生にもっと聞いてみたかったことや、皆で深めていきたいと思ったことがあると思いますので、それらを出して頂きます。それをまず全体で整理していき、どういうポイントがあるのかを見出したいと思います。それを基に、何故それが重要であったのか、今参加されている先生方の中にもそれぞれ実践されていることがあると思いますが、なぜそのポイントが重要になるのか、また、言い方は悪いのですが、ではなぜそれが出来ないのか、何が原因かということ。そして、逆に、どうしたら出来るようになるのか、といった所を皆で知恵を出し合いながら深めていって、ESD を実践していく上で、こういうポイントがある、アイデアがあるというのを、この分科会の中で 10 ぐらい出せたら良いのではないかと思います。

では、今から 10 分ぐらいでそのポストイットを貼りだしていってもらいたいと思います。それを私の方で整理していきたいと思います。学生の皆さんも手伝いますので、出来ることがあれば言ってやって下さい。

○ファシリテーター　柴川弘子

それではだいたい出揃ったようです。今学生スタッフの手も借りながら、皆さんから出して頂いたポイントについてまとめてみると、まず、ESD をやっていく上で大事になるポ

イントが大凡 3 つ、4 つに分かれていたかなと思います。1 つ目は細かい手法の点ですね。



「どうやって国際交流を進めていくのか。」国際的な視点を養っていく総合学習を進めていく上で、バイリンガルのプレゼンテーションというのは非常に良いのではないか。そして、クロスアート。それからペンパルを持つこと。ペンパルアクティビティ。この三つですよね。手法に関してこうしたポイントが出ていました。それから、もう一つのポイントが、プログラムの共有、見える化、それから全体化。永田台小学校の先生もよく言われていた言葉ですが、ホールスクール・アプローチで、学校全体で運営していくこと、が二つ目として出ていました。特に、分かりやすい、誰でも出来るプログラム。カリキュラムマップを作成したり、担当者が替わっても担当できる実践事例。毎時間の指導案を作成して、共有する。成果物が出来ると共有されやすいといった点や、あとは、ホールスクールアプローチと一言で書いて頂いていますが、これらをまとめると、「プログラムの共有・見える化・全体化」ということかと。そして最後に、先生のお話しの中でも印象的だったのが、「困難をチャンスにすること」、寧ろ「困難はある方が良い」と。私たち自身も含め、生徒の変容のきっかけになることだと思いますが、困難に出会った時こそがチャンス、乗り越えた時こそが成果だとか、マイナスをプラスに変えるという発想。それから、国際理解というのは普通は出来ないものだと捉えて、それを乗り越える意思を持つこと。それこそが、理解に繋がるということや、思う様にならないことがあるということで、文化の違いを教えることが出来るという、こういったことがポイントではないかということで出ていました。そして、最後にその ESD を続けていくための成果とその評価のあり方ですね。こういったところで、先生のお話を聞きながら、新しい視点が出てきたようです。例えば、他の先生が出して下さっていましたが、同じ学年の生徒や見えない他者を気に掛けることが出来るようになっているかどうか。学んだことを自分の実生活の中で、即実践しているかどうかということ。これは小学校・中学校の先生もおっしゃられていた「生徒の変容」ということ。その辺りを評価していったり、実践して

いった上での成果として捉えていくこと。こういったポイントが大事なのではないかと参加された皆さんは考えているようです。それから、教員の達成感が…？という点ですが、先生方がやらされている感が強いとか、生徒の達成感が無いから、結局「やらされている感」が強くなってしまうという点。それから組織編成が出来ていないという点や、学校全体でまだ取り組めていないという課題。組織体制が整っておらず、結局 1 人の教員が負担しているという課題や、特別な時間を設けることが困難で、全体への周知も困難で、総合学習と絡めることが本当に良いのかどうか？という疑問も含めて出して下さっているんですが、こういったポイントが出ていますので、この後皆さんで深めて話し合っていきたいと思います。

最後に「環境づくり・意識づけ」というグループにまとめさせて頂いたのですが、課題として「学び続けるものを励まし続けるには、ワクワク感とか、要するに「覇気がある」と書かれていますが、そういったものを出していくには、一体どうしたら良いのだろうか」といった疑問が出されています。こういった辺りについてもディスカッションしていきたいと思います。

質問については、時間に余裕があればということにさせて頂きます。

では、これから 15 分間ほどで、ディスカッションをしていきたいと思います。人数は少ないので、二つに分かれて、出来るだけ違う学校の先生と一緒になるように席を移動していただけますか？

―グループディスカッション【省略】―

○ファシリテーター　柴川弘子

すみません。そろそろ時間です。では、話し合った内容、出てきたアイデアについて、各グループで発表して頂ければと思います。こちらのグループからお願いします。

○参加者

では、私たちのグループではかなり白熱した議論が行われました。やはり担当する教員が限られてしまう。そして、1 人 2 人の教員に全て任されてしまう。コミュニケーションも育たないというような問題が各学校それぞれにあるということが分かりました。そこで、どうしたら良いかということですが、先生方の組織を見渡してみると、このような ESD の活動に興味を持っている先生というのは、必ずいるものです。普段の授業のあり方とか、生徒との関わり方を見ながら、この先生なら分かってくれるんじゃないかな？という先生を見つけたら、一対一でしっかり話をしながら、相手の立場を認めながら、ああそのアイデアは良いね、と言いながら、段々と仲間を増やしていって、組織を作っていくのが良いのではないかなという結論を見つけました。

○ファシリテーター　柴川弘子

何より、仲間づくりだと。そこから始めるということですね。こちらのグループは？2 人に発表していただけるのですね。

○参加者

まず、問題点として、「やらされているという感じがある」というのが、どうしてもあると思うのですが、それに対して教員生徒が達成感を持てるような内容にしていくと、そういう点からも脱出できるのではないかなという。そして、いかにそういう内容を作っていくべきかという話になりました。

○参加者

「決められたプログラムに可変性を持たせる」ということですが、「良い意味でのゆるさ」という言葉も出ています。生徒の実態に合わせて変える部分とか、やめる部分とか、フレキシブルに合わせていくという。こうでなければいけないという風に、あまりがちっと決めてしまうのではなくて、そういう余裕の部分をちょっと残しておくという風にしておくことがひとつです。それから、もう一つは、「生徒が成長する過程」ですね。保護者も含め

て皆、生徒が出来なかった部分も含めて成長した過程を色々な人に見てもらって共有する。見える化という言葉も使いましたが、達成感に繋がるように、モチベーションにもつなげていくということ。それから、学校全体でやっていくということ。係だけがやっているのではなくて、私は知らないというのではなく、みんなでやるという意識づくり。それを皆でつくるように努力する。

○ファシリテーター　柴川弘子

ありがとうございました。良いアイデアが出てきましたので、前の黒板に掲示していこうと思います。その間に、永尾先生の方から皆さんに対して補足として参考になるようなスライドを見せて頂けるそうですので、よろしくお願いします。

○永尾和子（広島井口高等学校）

はい。今日は資料として ACTI2 の文系の年間実践記録を持ってきましたが、ACTI1 が一番分厚いんですね。ACTI2 の理系の方は文系の半分ぐらいのものですが、持ってくる予定が車で行ってはいけないと言われ、このケースに入るだけのものを持って来た次第です。実は ACTI1 の方もかなりの分量で、週に 1 時間ですが、35 時間以上あります。37、38 時間、あるいはもっとあるかもしれません。昨日広島大学のオープンキャンパスがあり、1 年全体で行きましたけれども、これも ACTI1 の中に組み込んでいて、引率は担任が行きますが、学習は ACTI 1 の中でします。小論文の指導も全体のプログラムと上手く結び付けて、「この社会に自分がどう貢献できるのか」というテーマで書かせて指導する。小論文て生徒は面倒がることもあるんですが、ここでは一生懸命書きます。すごく一生懸命やって、クラス内コンクールを経て、最優秀を取った時には皆拍手。持っていき方によっては、すごくたいぎに思える学習も、楽しいものになる。やっぱり持っていき方ですね。楽しいんだと思わせるノウハウというのはやはり大事だと思います。教員がしんどいような雰囲気を見せたら、絶対生徒にもすぐ伝染しますから。職場訪問なども一年生には行かせるのですが、井口高校というのは周りに 900 の企業がある広島市西区商工センターというところのど真ん中にあるんです。その企業に協力頂いて、年間７，８０の企業が受け入れてくれるんです。ですから、５，６人の小さいグループで自分たちが選んだ企業へ行く、というそういう取組も出来ます。そういう時に、前の学校も同じようなことをやっていて、生徒をあるスーパーに行かせたら、担当の方がタバコ吸いながら「まー君らも大変よねー。学校で行かないけんから来るんだろ。」みたいな感じで言ったわけです。生徒はそれでがっく

りきて、戻って来てすぐ報告して、次の年からそこははねましたけれど。同じことですよね。教員も「やらされ感」を生徒の前に出して指導して、上手くいくわけがない。やはりやっている先生が「おもしろいね、楽しいね」と感じて、どんどん迫っていくことが大事と思います。そうしたら生徒が乗ってくるので。それで、生徒が、そうやって一生懸命、ああしようこうしようとやって、それで課外でもやります。締切があるから。生徒は締め切り前は一生懸命残ってやります。

これ、英字新聞ですが、二年生は一番最初だけは日本語でするんです。中国新聞のみんなの新聞コンクールってご存知ですか？岡山県でも参加されている学校があるのではないかと思いますが、これ、とっても良いコンクールなんです。これ、取り組みやすいものですね。特に普通科なんかでやるには良いと思います。それで、みんなの新聞コンクールにはいろんな部があって、これは切り抜き新聞の部というものです。新聞を読んで、切り抜いて、自分たちの意見を沢山貼って書いて、レイアウトとか色使いとかすごく大事なんですけれど、これを 9 月の 5 日ぐらいが締切なので、一学期の前半、４、５月が取り組みの期間になります。締切は 9 月であっても、４，５月の二か月のみ取り組みます。なぜかと言うと､それは先程も言いましたが､保護者にもこの ACT の中身を知らせるということで、6 月の上旬に文化祭がありますが､まず文化祭で全部展示して､校内コンクールを先にする。来場した保護者や教員、生徒に投票してもらう。今年はかなり来てくれました。最初は 20 人も来ませんでした。他の面白い催しの方へ流れるけれども、最近は沢山来てくれます。最初は文化祭の展示などは担当の教員が必死で用意して、パネルなどもはっていたりした。今は各分野から代表が出て準備して、当番も生徒で順番にやってくれています。何の疑問も無く、喜んでやってくれます。左側のは確か教育委員会賞を受賞したものですが、癌のことについてやっていますけれど、彼らはこれをバイリンガルプレゼンでも、英語でもやりました。繋がっているんですね、全部が。

1 年から 2 年への取り組みはやはり全部繋がるように作ってあります。1 年は進路探究をしながら、それを基に自分は社会でどのような役割を果たしていくのか。社会でどんな仕事について、どんなことをするのか。2000 字の論文にまとめるのですが、それを踏まえた上で、2 年生になって文理に分かれて、自分の興味のあることについて課題研究をしていくという流れになっている。それでそれぞれの分野、4 つの分野がありますが、国際・環境・人権分野、政治・経済・法律分野、教育・歴史・文化分野、そして医療・看護・福祉分野。長ったらしいですが、生徒の興味をなるべく吸収するために、そのような分け方をしています。それぞれの分野に分かれて、クラスを超えてグループを作って活動をしていきます。

普通は出会えない人と出会えるので、これも魅力のひとつです。どうやって分野を分けるかというと、志望理由書を書かせる。これも 1 つのアイデアですが。自分の行きたい分野になかなか行けない。全員が第一希望には行けません。だから、志望理由書をちゃんと書く。これがきちんと出来ていなければ、第二、第三に回されるという。そうしたら、第二、第三に回った生徒も文句は言いません。大概第二志望ぐらいで行けますけれど、自分が何がやりたいのかをはっきりさせるという意味もありますし、第二、第三分野に行っても、それなりに納得していくと。それを読む手間は大変ですが、担当者は全部志望理由書を読んで、きちんとした内容のものから第一志望に振っていく。クラスを超えてグループが出来て、最初はぎこちないけれども、1 年を通してそのグループは変わらず、段々と上手くやっていくようになる。その時に、アイデアはやはりとても大事で、二年生はやはり英語を使います。各分野の担当、英語の教員は 1 人ずついますので、グループ分けをするとき、グループは生徒が作っても良いことにならないので教員がしますが、英語の得意な人を一人は入れておくと。全然英語が出来ない人が 5 人集まっても大変なことになるので、そういうことで、力関係も考えてグループを作らせたり、やはり能力も大事なので、そういうところを均等にするように教員が責任を持ってグループを作る。グループ作りはすごく大事なので、そういうことにはすごく気を遣っています。

上手くいくためには、細かいところで気を遣わなければならないことは沢山ある。だから、こういうところまで喋っていたらとても 1 時間、2時間では足りません。でも、ノウハウってやはりある。上手くいくためには。ネゴシエーションの方法とか。先ほどもアイエア高校の校長の態度がコロッと変わったと言いましたが、それもこちらが文通したいという気持ちだけでなくて、ちょうどアイエア高校の 50 周年があった。これはゴキゲンを取るチャンスということで、うちの生徒会を動かして、「アイエア高校 50 周年だけど何かせんでええの？」みたいな感じでたきつけて、生徒に考えさせて、学校にお金を出してもらって、各クラスに分厚い布地、ものすごく大きな縦 180、横 180cm ぐらいのものを、アイエア 50th で 8 文字。ちょうど 8 クラスあったので、一文字ずつ大きく書いて、その大きな文字の中をみんなが寄せ書きで書いて、それで色に代えると。イメージとして。そのばかでかいアイエア５０周年という大きな幕をまいておいて、合図とともに、修学旅行委員が 2 人ずつだーっとならんで、合図で一斉に落とす。その一文字一文字の中に各クラスのメッセージがびっしり。校長は本当に喜びました。やはりネゴシエーションをすること、細かいところで人を動かすためのノウハウがあるので、それをアイデアとして活かすのはチームリーダーとして大切。

本当はそういう細かいところを外に出すのはあれなんですが、でもその細かい所が一番大事なんですよね。ちょっとしたことなんですけど、そこに気を配るかどうかで、上手くいくものもギクシャクしてしまうことがある。私はネゴシエーションは色々な意味で、自分のテーマかなと思いますけれど、アリゾナ問題って、アリゾナ記念館が午前中に日本人を入れないと言いだして。うちは午前中に行かなければ、後のプログラムが上手く成り立たない。それで私はわざわざ自分でハワイまで行ったんです。アリゾナまで行って交渉して、ものすごく訴えました。先生の言われた通り、思いのたけを訴えました。旅行社に言って、面会だけは出来るように整えてもらって、向こうに行って担当者の人が来て、とにかく「なぜ、アリゾナに行きたいのか」。向こうは「ミズーリではどうか？」と言ってきたんですが、ダメだと。「アリゾナでないとだめだ。広島から行くんだ。太平洋戦争が始まったアリゾナ。そこへ、戦争が終わったヒロシマ、原爆が落ちたヒロシマが行くんだと。そこに絶対に意味がある」って、すごく訴えた。そうすると分かってくれましたが、ただし、事務的処理をする人はその人ではなかった。最終的に午前中に入ることは出来なかったんです。

ただ、そういう取組を生徒にも伝えるんですよ。「アリゾナに簡単に行けると思うなよ」と。「修学旅行で簡単に行けると思うなよ」と。「いろんな人が、旅行社の人も、担任の人も、力を尽くしているから、君らが行けるんよ」と。「それを観光気分でハイハイと簡単に連れて行ってもらえると思うなよ」と。すごく言うんですよ。「自分で行くんだよ。何をし

に行くのか、行く前によく考えろ」、と。全体の前で行く前に話をするのです。やはりそういうことを生徒に伝えていく、乗せていく。それは先生たちの心も動かすと思います。

○ファシリテーター　柴川弘子

先生、ありがとうございます。もっともっと聞いてみたいこともありますが、残念ながら閉会の時間が近づいてきました。今日だして頂いたアイデアについては、ESD 協働推進室のウェブサイトで公表したり、今日昨年度の研修会の報告書を自由にお取り頂く形で配布させて頂きましたが、この研修会は一冊の報告書にまとめられます。その中で紹介していきたいと思っています。またその報告書自体もウェブサイトからダウンロードできるようになっていますので、ご期待下さい。

また先生にはお忙しい中、今回の研修会のために素晴らしいお話しと沢山の資料を頂き、ありがとうございます。ESD は難しいが故に、「楽しい、簡単だよ」という面が強調されがちですが、今日やはり「難しい、大変」だからこそ、意味がある、醍醐味がある、ということがよく伝わってきたなと思います。先生が蓄積されてきた糧、それは ESD の資質だけでなく、教員としての資質としても大きく関わってくる部分かなというのを感じました。今後はこのような場が岡山のユネスコスクールだけでなく、様々な学校に広がると良いと思っています。改めて、今日は本当にありがとうございました。

付　録

プレゼンテーション資料

１.「授業という枠を超えて、学校全体を『まるごと ESD』にするための１歩を踏み出す」
～イギリスのサスティナブル・スクール調査から捉えた ESD エッセンス～
横浜市立永田台小学校　　住田昌治　校長

２.「教科間のつながりを重視したＥＳＤ実践」
金沢大学附属中学校　　戸水吉信　教諭

３.「ACTI における ESD の実践」
～ハワイ姉妹校とのペンパルアクティビティを通して～
広島県立広島井口高等学校　永尾和子　教諭

ワークショップ成果物

「２学期からできる！」ESD のアイデア集

学校丸ごとESD

～ホールスクールによる学校活性化～

ESDで変わる学校、元気な学校づくり

カリキュラム

学習

地域活動

学校運営

永田台小学校作成

1

先生が多忙なのは事実だが、より大きな問題は「多忙感」にある――。そこに着目して改革を進める学校が横浜市南区にある。高台の住宅街にある市立永田台小学校だ。住田昌治校長（58）は、持続可能な開発のための教育「ＥＳＤ」に10年にわたって取り組んできた。

「問題は、長時間働いても自己肯定感や充実感がないことです。子どもは大人の姿を見て育つ。職員室のあり方はそのまま教室の姿につながります」

住田校長は、ボトムアップの学校運営を心がけている。15年度には「先生元気化プロジェクト」を実施。教師自身が日ごろ感じている課題を洗い出し、定時退庁日の設定、学年便りと学校便りの統合など、12の課題に取り組み、解決した。

今年4月には教師からの提案を受け、職員室の一角にカフェコーナーも設置。教師同士の日常的な対話が増えたことで、会議の数も減らせた。

「なによりの成果は、先生たちが明るくなったこと。現場にどれだけ任せ、見守れるか。そこに校長の力量が問われます」

住田校長は力をこめて語った。

多忙解消とESD？

学校の持続可能性

地域の持続可能性

地球の持続可能性

教師の持続可能性

学校でESDを持続発展させるために

- 「持続」するためのアプローチ
- 「発展」するためのアプローチ

持続・発展する学校へのアプローチ
持続：楽しい、負担感が少ない、やりがい、主体性、成長、変容…
発展：新しい、イノベーション、囚われない…
そのためのアプローチ: デザイン、再方向付け、リーダーシップ、ケアリング、エンパワーメント…

学校全体の試みとしてＥＳＤを実践し、授業のみならず、課外活動や学校運営、地域での活動まで一貫してサスティナビリティーの波紋が広がってきている。

また、どこの公立校でも学べるような普遍的な理論に裏打ちされた、持続発展的なストーリー性のある実践が日常的に行われるようになった。各学年の取組一つひとつが、児童の意識の変容に深く関わっている。

本校のESDは、持続可能性に向けた価値・行動・ライフスタイルの変容を具現化し、持続不可能な様相を呈している地域社会を持続可能な方へと子どもたちが導く。

授業デザイン検討会

話したいことを　話したいように　　誰とでも

PTA総会もこうやれば楽しい

職員室の日常

ESDは特別なことではない

ESD実践校に共通する点

教師も子どもも

排他性・凝集性・壁の低さ・多様性・受容性・学習意欲の高さを感じる。

そして、核となる考え方（思想）が各校にある

永田台では「ケアの心」→ 見学者がモヤモヤ感を抱く理由。学校教育活動全体の中にESDがあると捉えているから。それが、ホールスクールアプローチ！

ESD推進のためのユネスコスクール宣言
（ユネスコスクール岡山宣言）

私たちは、ESDの本質を理解するとともに、ESDの魅力を広く社会に伝えるため、児童生徒の変容、教師の変容、学校・地域の変容を明確に示します。

自己変容と社会変容

ESDの本質は、持続可能性。ESDの魅力は、変容。

Learning to transform oneself and society

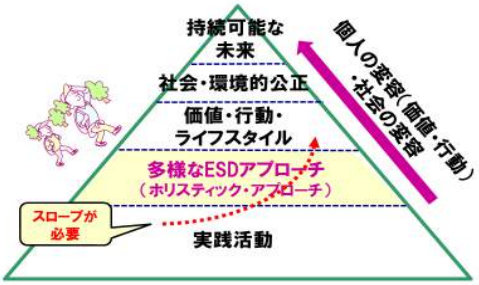
共有したい課題

- ESDは、表面的な変化は見られても、深い次元での「変容」が見られない実践が多い。
- 「変容」は児童の変容から学校全体の変容まで、いろいろなレベルで語られるべきだ。ESDの結果、どんな変容が見られたのか？
- 持続可能性と持続不可能性とがせめぎ合う地球・地域・学校・家庭・個人の現実の中で、いかに持続可能な未来への変化の担い手になることができるのか

［ESD登山スロープと
ホリスティック・アプローチ］

「SD山」の山頂までの過程・・・

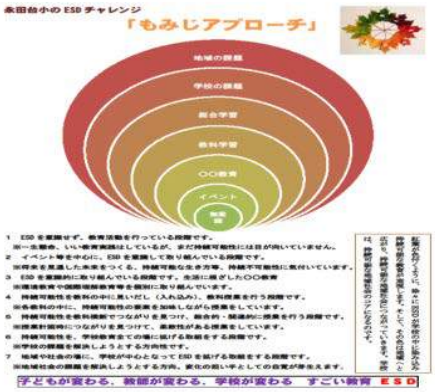
永田(2012)に基づき加筆



ESDらしさとは？

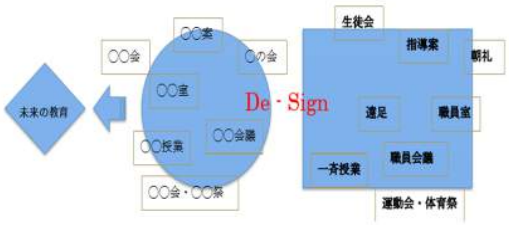
☆知識習得・活動＜変容
☆教室・プロジェクト＜ホールスクール
☆指示・指導＜内発性・自発性
☆ローカルベース＜グローバルチャレンジ
☆問題解決＜価値変容
☆計画＜デザイン
（De・sign　再方向付け）　今がチャンス！

［もみじアプローチ］



ホールスクール・アプローチ

Plan（計画）からDesign（デザイン）へ



©永田佳之研究室

ESDデザイン～境目を超え、つながり合う教育、ESD

持続可能な未来の担い手となるために、今ここで何をするのか？
境目を超え、つながり合う教育 ESD

2者の距離をお互いにバランスよく縮めて、つないで考える。
徐々に両者が中心に近づいていってESDとなる。→価値・行動・生活様式が変容する。

- ○世界－身近　世界共通の課題を身近な課題に変換して取り組む　「アクトローカリー」
- ○教科－総合　教科の壁を超えて、総合との関連的な学習を展開する　「つなぐ授業づくり」
- ○学校－地域　地域の課題を学校の課題として考える　「引き受ける」
- ○授業－生活　授業での学びが生活に生かす　「生活の変容」
- ○教室－職員室　教室で求めることを、職員室で体現する　「子どもは鏡」

ESDを成立させるために求められる資質
- ○サーバント・リーダーシップ　＝任せる
- ○根源的で、本質的な問い　＝問う
- ○コーディネーター　＝つなぐ
- ○ファシリテーター　＝引き出す

ESDを進めるための学校づくり
- ○自由　やりたいことがやれる自由
- ○平和　望まない争いに巻き込まれない平和
- ○希望　今日より明日、今年より来年が良くなるという希望
- ○ケア　お互いを気にかけ合い、声をかけ合う雰囲気

住田(2016)

［横浜ESDフローラ］

環境・開発テーマ
をつなげるESDから
（ESD国内実施計画）

学校における持続可能性に関わる
多様なテーマ（教育・学習課題、ガバナンス、コミュニケーション、グローカル性含む）をつなげる
ESDフローラへ

19

ESDの魅力「変容」

堂々と、自信をもって語る子ども達

「つながり祭」

赤ちゃんからお年寄りまで

南永田団地

空き店舗で初の住民祭

憩いの場作りへ模索

地域の持続可能性

こども認知症サポーター養成講座

生ゴミワーストワン脱出大作戦

ＥＳＤ色に染めていく

「いざ鎌倉プロジェクト」

文化遺産登録応援　大仏切通で清掃活動

「世界の鎌倉へ」児童ら願い汗

南区・永田台小の６年生

（東京新聞　平成24年1月31日(火)）

韓国児童との授業交流

4年生との習字の授業

6年生との陶芸の授業

エコプロダクツ出展

本気で考えたことを、本気で伝える。伝わったかどうかということに感心を向ける。そして、自分への気づき・価値を実感。

社会への発信。学校での取組、子どもの意見が社会を変える。自己肯定感・社会参画への基礎作り。

ＥＳＤ色に染めていく

ホールスクール・アプローチの始点

- 現状把握

  児童・生徒および教師の日常（生活態度、学力など）を捉えること

- ビジョンの確認

  私たちが生きている社会・環境の何が問題であるのかを認識する。

  その上でどのような教育活動が求められるのかを話し合う。

私の考えるESDの土台

- 自由

  やりたいことができる
- 平和

  望まない争いごとに巻き込まれない
- 希望

  今日より明日、今年より来年が良くなる

- そして、何よりも排他的でないこと

ESDの担い手となる皆さんへ

- 元気づけること

  学び続ける者を元気づけることがESD
- 学校教育におけるESD

  学習内容に関すること

  教育環境に関すること

  評価に関すること

  社会変容に関すること
- 気にかけること

  自分・他者・見えない他者やもの

  理性と感性の両面から
- そして、何よりも排他的でないこと

横浜市立小田谷小学校
校 長 住田 昌治

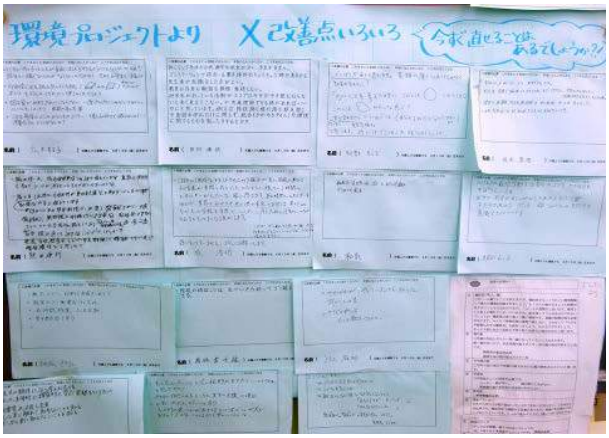
先生たちがつながって元気でいること

お互いにケアリング＝壁をつくらず橋をかける

職員室の笑顔と元気がESDになる・・・
ご清聴ありがとうございました。

教職員への
アンケートの
実施

いいところと改善点が
たくさんでてきました！



保護者の方々も、
永田台小学校のよさ
と課題をだしてくだ
さいました！

すきま時間に・・・・

朝日新聞

2014年(平成26年)12月9日　火曜日

社説余滴

氏岡 真弓

学校はESD色に染まるか

環境省が、地球温暖化問題などを学ぶ「環境教育」の一環として、「環境教育指導者養成プログラム」を始めた。「可能」だからだという。

「私は国際的な会議に出席したことがあるが、そこでは、北極圏の人々が、外国の学校とテレビ会議で議論する。授業を通じて、地球の問題を考えるのだ」と、文部科学省の小松裕課長は説明する。

この教育目的に賛同した小学校は、現在、国内で約800校。ユネスコ（国連教育科学文化機関）の教育目的の一つに「持続可能な開発のための教育（ESD）」を掲げる学校の調査・研究を通じ、地球規模の課題を身近なものとして考え、その解決に向けて、行動する人材を育てる狙いがある。環境問題、人権、多文化共生などの幅広い。

小松課長は、「部署間の800校の10年、はや節目の年。ユネスコの世界会議が、名古屋市で開かれた。

推進拠点としてのユネスコスクールは800校を超え、世界全体で、千数百校を数える。日本の教育全般をいう。

「ESD」を掲げる学校は、ESDの理念を実践するための組織を作ることが、ESDの推進に不可欠だ。

ESDの理念は、「地球的な課題を、自分の問題として考える。そのための組織を作ることが、ESDの推進に不可欠だ。

校務分掌の一部に、ESDを位置づけるなどの

［教員による冒険ESD］

先生による冒険ESD（試行・挑戦・共愉）～
“とらわれない”

［教員による冒険ESD］

先生による冒険ESD（試行・挑戦・共愉）～
“おそれない”

［教員による冒険ESD］

先生による冒険ESD（試行・挑戦・共愉）～
“あきらめない”

自尊感情によって好循環

問題を起こしている自分たち→無気力→持続不可能な地域社会の悪循環

どうしようもない。
あきらめ。
人のせい。

無理だと思わせるような教育ではなく。自信・自尊感情によって好循環を！

問題を解決できている自分たち→自信・自尊感情→持続可能な地域社会の好循環

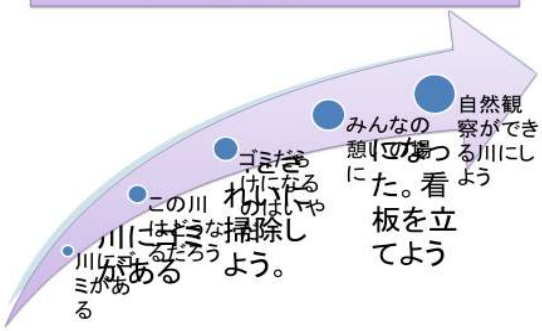
25年で社会を変えたバルト海プロジェクト

先生が元気

シンプルなことから始め、地域に広げていく

「戦争は人の心の中で起こるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」ユネスコ憲章前文

「深い学び」がESD



ESDならではの授業とは？

多様なものの見方・考え方 ESDは面倒くさいけどやりがいがある。

先生たちが
みんなファシリテーターになっている？

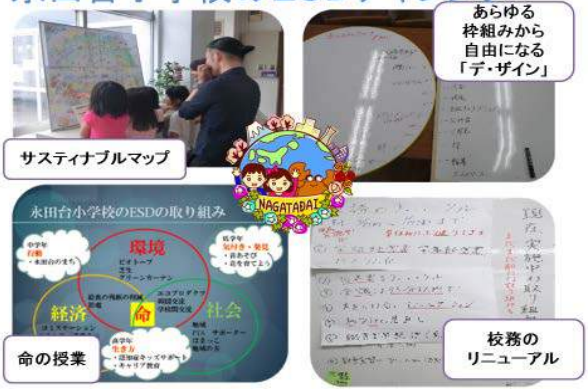
Aさん（12年目）

- この研修会自体が教員バージョンのアクティブラーニングだと思う。
- 交流がメインなので、時には話したい人（授業者）と話せなくて、自分の気持ちを置いてきてしまうことがある。
- ゲストに気をつかいすぎなくてよい。
- （思っているかもしれないけれど、）あらさがしをしなくなった。「もっとよくなるにはどうしたらよいか」を考える。「みんなで感」
- 気付いたら他の研修の場で自分が発言することが多くなっていた。（⇒「思ったことを言う」が普通になってきた）

Hさん

- あくまでも日常の延長にこの研究会があり、気付くと「この日のために」のムードがなくなっていた。
- 推進メンバーが経験を重ねてきていて、誰でもファシリテーターに挑戦できる。（養護の先生も！）
- ケアし合える関係ができ、年齢や経験の差はあっても、必要以上に気をつかわない。
- 短い時間でも打ち合わせをもち、時間の取り方や問いのたて方について「これでいけそう？」「うん、いける」となるまで確認すること、は続けていく。

永田台小学校のESDチャレンジ



変化を起こす研究・研修へ

～学び続ける教師の姿こそ、子ども達のモデルとなる～

こんなことしてきたからかな？
永田台の研究会

一堂に会する時間は短く	何でも言える	メンバーを混ぜる
結論を急がない 決めすぎない	明日からやること	よりよく変わり続ける

一堂に会する時間は短く

（図書室　ランチルーム）
（はっきりさせておく　延ばさない）

何を言ってもよい

話しながら
書きながら
聞きながら　考える

「あーでもない　こーでもない」
（自然体）（笑いもある）

何を言ってもよい

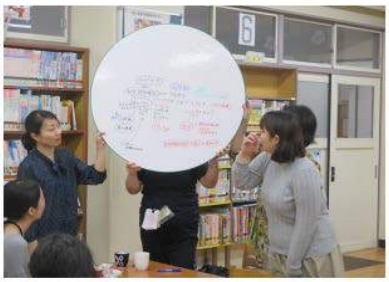
心のかべをとりのぞく
「円たくん」

メンバーを混ぜる

「フラットタイム」
ふらふらと歩いて、見て、
考えて、書き加える

結論を急がない 決めすぎない

「こんな話が出ました」
「ここが困ってます」
「こうなっていきそうです」
今の状態を見つめ、プロセスを検討（× 詳細　枝葉末節）



明日から
やること

GAP（グローバル・アクション・プログラム）
「明日からのチャレンジ」

よりよく
変わり続ける

「この指とまれ方式」
話し合いたいことを出し合って、
グルーピング

よりよく
変わり続ける

話し合ってほしいこと
「モヤットポイント」

ティータイム✌「コップをもって集合」

子どもたちも・・・

S校長

- 学校が変わった！は周りの人がいうこと
  自分たちではよく分からない。
- 「永田台ってどうしてあんなに元気なのかしら」「不思議だ」「元気だ」と言われる
- そこにはどんな秘密があるのか？という問いがある「何があるのだろう？」
- 学校に一歩入った時の感じがそんな感じのようだ
  「先生たちキラキラ輝いていますね」 構えていない　がちがちではない　リラックス
- 「グレーからカラーに変わった」
- 地域や保護者の声を聴くのが一番よい　PTAが協力的、主体的なのは、学校（＝教員）が変わったからか？現在進行中
- 立ち止まって考える　いらないものは削る
- チャレンジし続ける　変容は止まらない

教師が変われば　子どもが変わる

⇨価値観　行動　ライフスタイルが変容していく

挑戦する中でしか人間は成長しない。

置かれた環境の中で、できることを考え、行動し、どう表現するかは、教師の個性と創造性に任せる。
そうなるような、そうするような環境をつくることが管理職の務め。
同じようにことを変わらず何回もやっていると大事な出汁がでてしまい、出がらしになる。

学校経営の基本

教員（保護者）のよいところ・強みを見る→学校（家庭）で共有する→教員（保護者）に伝える→教員（保護者）に自信がつく（自己効力感が高まる）→子供の先生（保護者）への信頼感が高まる→教員（保護者）の子供へのポジティブな関わりが増える→子供が成長する→子供が学校（家庭）に結びつきの力をもたらす→学校（家庭）が安定する→学校（家庭）で教員（保護者）のよいところ・強みを見る余裕がさらにできる。

不思議なもので、この循環ができると教員・保護者・子供が信頼感の中で、「弱み」を認め合い話し合える「絆」も生まれる。これらのポジティブな循環を作り上げることが、子供の教育環境を向上させる。そのためにも、教員、保護者や地域の全てが「ほめて」「認め合う」ポジティブなつながりを持ち、「いいとこ取りの教育環境づくり」「強みを生かす環境づくり」を推進したいと思う。そして、それを子供たちに示していく必要がある。未来社会の変化の担い手となる子供たちの教育環境をつくるのは大人の役目だ。

ホールスクールアプローチのためのデザイン

支配するリーダーシップ→見守るリーダーシップ。
マネジメントするリーダー→マネジメントしないリーダー。
大人のペース→子どものペース。
大人の時間→子どもの時間。
形骸化した研修→変化を起こす研修。
教師の指導→子ども同士の学び合い。
定例会→開催する参加する必要のある会議

「やっていることがＥＳＤ」

横浜市立永田台小学校長　住田昌治

ＥＳＤは「変容をもたらす教育」と言われている。

「君たちのやったことが、地域の人に変化をもたらしましたか？」

「はい！私たちが学校の周りをチェックして、ゴミ拾いをして、その後も観察してきました。市にも地域の様子を伝えてきました。地域の人はまちを汚さなくなりました。以前より綺麗なまちになりました。」

今年３月、イギリスのレスター市で行われた「サスティナブルスクール・カンファレンス」に参加した前に、地元の公立小学校を訪問する機会を得た。学校内を見学した後、高学年の子どもたちとの意見交換会の場が設けられていた。私の他に日本の大学の先生が２人、韓国の大学の先生１人が参加した。子どもたちが話を始める前に、校長先生が「子どもたちは、話し出したら止まらなくなりますよ」と嬉しそうに言われた。

一人の子が口火を切った。「私たちがやっていることは生かされています。芝刈りをして得たお金で新しい環境をつくります。畑で作ったものをみんなで食べます。パンプキンスープはとても美味しかった。自分のやったことに自信をもっています。」「健康的な食事をしているか見ています。昼食にジャンクフードをもって来た子がいた場合は、親への啓蒙をしています」「通学　に何を使っているか調べて、よく歩いている人にはバッジをあげています」「水道や電気の使用　量をモニターして使いすぎに注意しています。毎日、私たちがエネルギーの管理をしています」

「家庭へのプリント配布をやめて、学校からＥメールで伝えてもらっています」「フェアトレードや有機農法にも取り組んでいます」…。最後に「私たちは授業を楽しくやっています。友達と仲がいいのも自慢です」と。本当に子どもたちのフリートーキングは止まらない。子どもたちは、よく話すが、よく聞く。驚かが話しているときは最後まで聞いている。そして、驚くことは手ぶらである。日本だと発表のための原稿や資料を準備するのだと思うが、何も持たず、聞き手を見ながら自分の言葉でしっかり話す。質問にも、その場で考えて答える。さぞかし優秀な学校なんだろうと思って聞いていたら、子ども達が校長先生に発言を促した。

「赴任当時、児童の様子は決してよいとは言えなかった。学力テストの結果もよくなかった。優先課題にくるのは持続可能性ではなかった。学校の状況を把握し、『やっこと』を大事にしてエコスクールとして活動してきた。その中で子どもたちの活躍が大きい。先生達もいい仕事をして　いる。まず数人でいいから、情熱を持っている人から始める。彼ら、彼女らの実践の『いいね』　が学内に広がる。トップダウンではだめだ。ワクワクする先生、情熱的な先生、子どもはそれを　見ている」とまとめられた。

その後、ホールで給食をいただいたが、高学年の子どもたちが、給食の配膳や片付け、さりげない低学年への声かけ、テーブルふき等、自然に行っていた。

ＥＳＤが学校内や生活に染み込んでいる。持続可能性が内在化している学校。学校のどこを切っても持続可能性の芽が見える。持続可能な未来をビジョンとして掲げながら、学校の今をしっかり捉え、情熱的でワクワクするような楽しい教育を行うことこそ、現状を変化させる担い手を育むことに繋がる。ＥＳＤをやろう！と構えて、難しい計画を立てて大変にするのではなく、今やっていることがＥＳＤだ！と言えるようになることが肝要だ。そのためにも、「とらわれない・おそれない・あきらめない」子ども主体の実践を積み重ねる。

平成28年度文部科学省「日本/ユネスコパートナーシップ事業」
ＥＳＤ・ユネスコスクール研修会 岡山2016

テーマ：学校でESD を持続発展させるために

2016 年 8 月 19 日(金)

中学校実践報告

教科間のつながりを重視したＥＳＤ実践

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校
教諭　戸水　吉信

本校概要

金沢市立公立小中学校ユネスコスクール
小学校：４４校／５６校
中学校：　７校／２４校

◆所在地等
〒921-8105　石川県金沢市平和町１丁目１番１５号
TEL:076-226-2121 FAX:076-226-2122
URL:http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/futyu/

◆学校教育目標
自由闊達な気風の中で，広い視野と豊かな人間性を持ち，将来，社会的使命を果たす生徒を育成する

◆生徒数
１年：４クラス　２年：４クラス　３年：４クラス　計４７３名

◆職員数
学校長：折川　司　　副校長：端崎　圭一
他職員２２名（国３，社３，数３，理３，音１，美１，保体２，技家２，英３，養護１）計２４名

本校概要

国立教育政策研究所　研究指定
平成２４年度　社会，理科
平成２５年度　社会，英語
平成２６年度　ＥＳＤ
平成２７年度　ＥＳＤ

国立教育政策研究所　ＥＳＤリーフレット

本校の教育目標とＥＳＤ

本校教育目標
自由闊達な気風の中で，広い視野と豊かな人間性を持ち，将来，社会的使命を果たす生徒を育成する

ＥＳＤの研究を進めることで
教育目標に迫れる

ＥＳＤの視点に立った学習指導の目標
持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし，それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して，持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う

ＥＳＤと本校のこれまでの研究

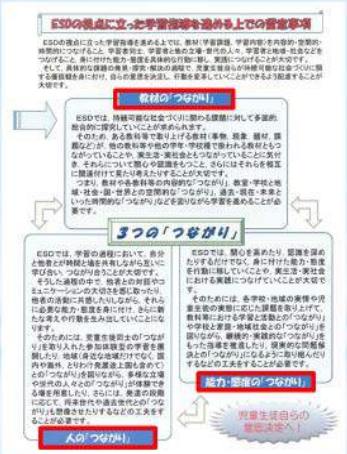
本校のこれまでの研究
問題を解決するための
思考と手だて

⇔

各教科等の思考力・
判断力・表現力等の
育成

各教科等の思考力・判断力・表現力等と
ＥＳＤとの関連を考えながら研究をすす
める素地ができている

ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度
①批判的に考える力
②未来像を予測して計画を立てる力
③多面的，総合的に考える力　　など



教材の「つながり」を重視

平成２６年度・２７年度研究テーマ

持続可能な社会の形成者として必要な資質・能力の育成
～教科間のつながりを目指したカリキュラム開発を通して～

能力・態度の「つながり」を重視

平成２８年度研究テーマ

持続可能な社会の形成者として必要な資質・能力の育成
～生徒の深い学びとカリキュラムの開発を通して～

総合的な学習の時間

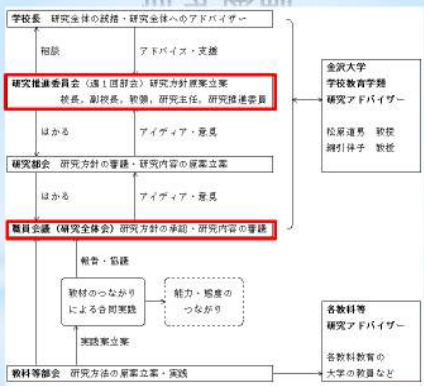
↓ 中心ではない

ESD ←特定の教科等 ×

↑ ○つながりを意識しながら

すべての教科等

研究体制



本校研究体制の特徴

・研究推進委員会（週１回，昨年度まで）･･･研究の方向性
　学校長，副校長，教頭
　研究主任（数），研究推進委員（社・家）

・研究部会（月１回）･･･具体的な研究内容，研究会等の運営詳細
　国１・社１・数１・理１・音１・家１・英１　（２６年度）
　国１・社１・数２・理１・　　家１・英１　（２７年度）
　国１・社２・数２・　　家１・英１　（２８年度）

・研究全体会（月１回開催）･･･研究についての共通理解
　全職員参加，職員会議とは別に開催

・研究アドバイザー･･･金沢大学人間社会学域学校教育学類の教授
　理科・家庭科の教授

１　教材の「つながり」について

①各教科等の年間指導計画の掲示

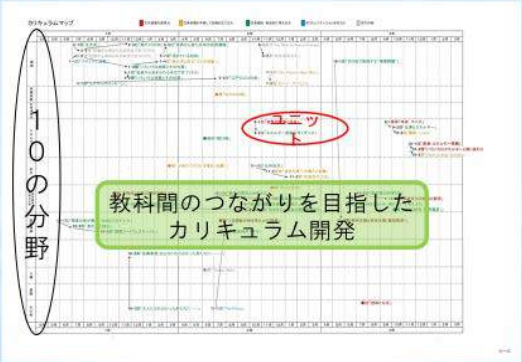
②ＥＳＤ週間マイベストの実施

③ワークショップの開催

１年目

２年目

④カリキュラムマップの作成



２　授業実践の充実

①小グループでの研究授業

実施月	教　科　等	学年	単　元　名（題材名）	分　野	授　業　者
５月	社　会　科	１年	世界各地の人々の生活と環境☆	国際理解	水橋　長之　教諭
	理　　科	２年	空気中の水の変化	エネルギー	北村　太郎　教諭
	美　術　科	３年	切り紙で表現する“環境問題”	環境	西澤　　明　教諭
６月	保健体育科	２年	跳び箱	エネルギー	廣瀬　尋理　教諭
	英　語　科	２年	チャリティーウォーク	その他	山岸　律子　教諭
	国　語　科	３年	能「羽衣」◎	地域文化財	岡崎　和美　教諭
７月	家庭分野	１年	食生活と自立（考えたてよう）☆	国際理解	橋本　正恵　教諭
	数　学　科	２年	１次関数（各国の標準時と日本の時差）	国際理解	戸水　吉信　教諭
	音　楽　科	３年	能の魅力を探ろう◎	地域文化財	鎌　千佳子　教諭

☆と◎は，それぞれ同じユニットであることを表している。

②実践事例の作成

３　「つながり」をもった実践事例

①１年国語科　１年美術科

国語科「大人になれなかった弟たちに・・・・・・」
美術科「おとなになれなかった弟たちに・・・・・」
挿絵を題材に表現の多様性を用いた授業

②１年社会科　１年理科　１年技術分野

森林を題材に，理科では光合成について
社会科では森林伐採による環境への影響について
技術分野では間伐や木材の種類・利用方法について学習した

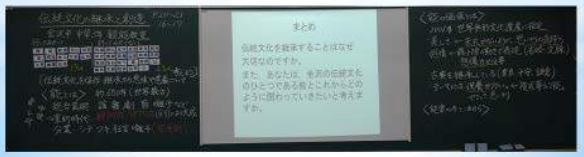
③２年家庭分野　２年英語科

セヴァンスズキのスピーチを英語科で１０月下旬に学習済み
家庭分野で衣生活の工夫でその内容を活用
Change our lifestyles.

さらに，家庭分野のライフスタイル（よりよい衣生活）の授業は，
社会科の研究授業「江戸時代のエコ社会」にもつながっていった。

④３年国語科　３年音楽科　３年社会科

金沢市の中学校３年生が観能教室に参加することに関連して国・音・社でそれぞれの教科の視点から，「能」や日本の文化について学ぶ



能を様々な教科で学習したことで、いろいろな面から能について学ぶことができた。国語では、能まとめ学習などで学びました。音楽では、能は音楽・演技・舞踊でできているということを学びました。社会では、誰によってできたのかを学びました。英語では、日本の文化を英語で表すことをしました。

そこから、能の歴史や構成など、あらゆる角度から考えることで、能をより理解することができたと思った。そして、他の教科で習ったことを、違う教科につなげたり、比較して考えることで、共通点なども見つけることなどができて良かったです。そして、知識を深めることができたと思いました。

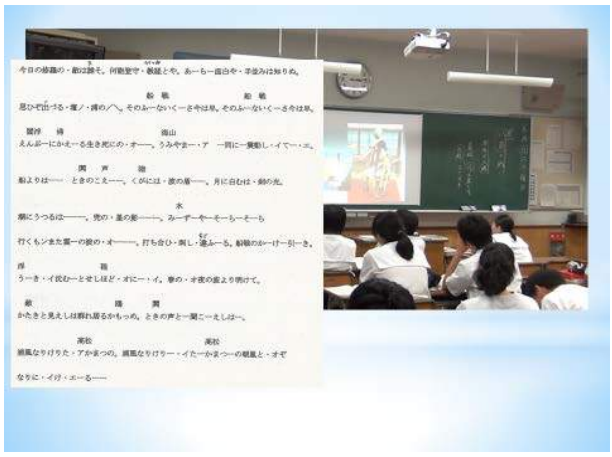
伝統文化を継承していくことの重要性を学ぶことができた。授業で学習する前は、何の興味も無かった。工芸品のように日常生活でも見かける伝統には魅力を感じることはあっても、能は日常生活と何の縁もなかったため、関心が湧かなかったのだ。しかし、いざ勉強してみると、社会で勉強した歴史とのつながりや、音楽で勉強した、オペラなどとの共通点が見えてきて、意外にも自分の生活にも大きからずつながりがあることを知った。

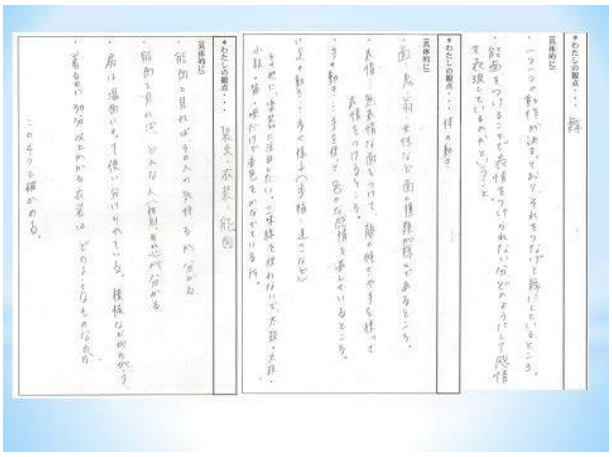
「能」の勉強を通して、今まで別々だと思っていた、10弱の様々な教科はすべてつながっているのだと感じた。

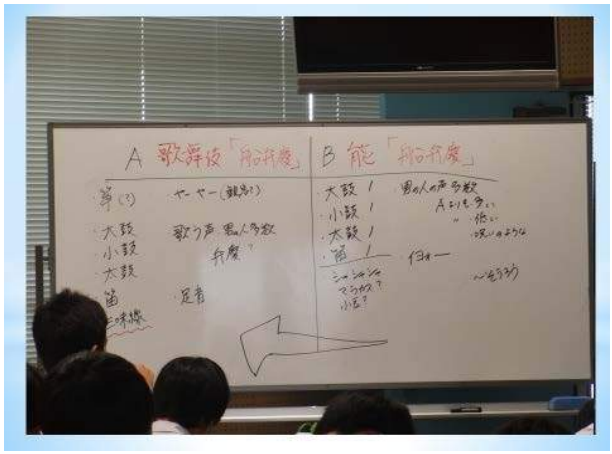
能の前に歌舞伎を学習したことで、もっと能について深く勉強することができたと思う。（オペラも）能という古くから伝わる舞踊を実際に見ることによって、その後の学習を自分なりにわかりやすく進めることができたと感じる。私は夏休みに加賀友禅という金沢の伝統文化について調べたが、そこで「各伝統文化は衰退してきている」という面白いものを見つけた。能も伝統文化であるが、本当に衰退しているのか、そんなことを考えるようになった。このように、能を学習することで興味や関心が湧き、能だけでなく、他の伝統文化についても調べてみたいと思うようになった。見るだけで意識や視点を変えられる能は素晴らしいと感じた

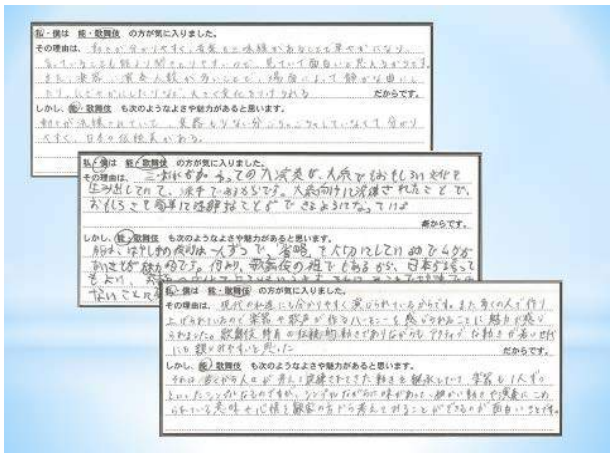
私は能観賞教室に行っても、また能を見に行きたいとは思えませんでした。
しかし、能という伝統文化は世界遺産のものであり、世界文化遺産というものに指定されていることを知り、能のすごさやすばらしさが広くとなく分かってきました。
また、能は最低限の動きで構成されているので、想像力が必要だということや、その中の美しさには身分制度があったころの思いやりの心も工夫が今もうけつがれているということを知り、世代にも受け継がれべきだと思いました。
工芸能をまた見に行きたいとは心から思えないかもしれないけれど、能について動画の共有などを通じてみたいと思います。

伝統文化を継承していくことは日本の「和の心」というのを継承していくことにつながる。和の心とは日本人の考え方にあった、思いやりであるとか、やさしさのことだ。何百年も前の人が大成した芸が今も残っているということはそれだけの価値があるということだから、これからも自分達が継承していかなくてはならない。
能に直接関わることはできなくても、観に行ったり、能の魅力を他の人に教えたりすることができると思った。



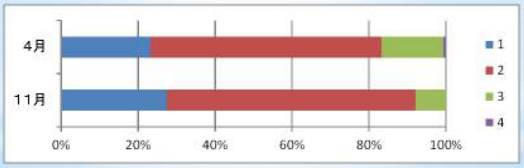






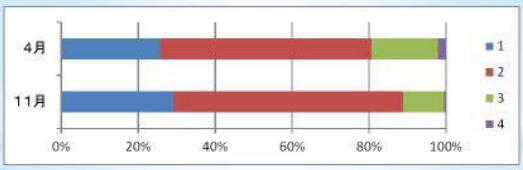
4　能力・態度のつながりについて

（1）「他者の意見をふまえて自分の意見を建設的に述べることができる。（代替案の思考力）」



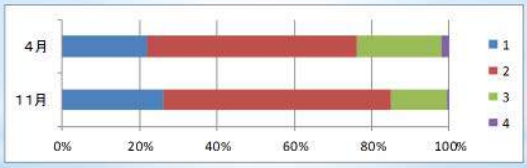
１いつもできる　２ときどきならできる　３あまりできない　４できたことがない

（2）「過去や現在の情報に基づいて，将来を予想・予測することができる。（未来像を予測して計画を立てる力）」



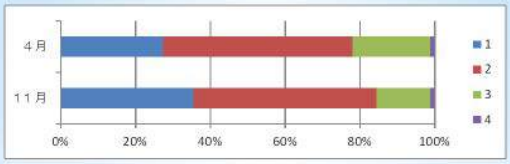
１いつもできる　２ときどきならできる　３あまりできない　４できたことがない

（３）「学校の学習内容と実生活や身の回りの環境とのつながりを考えることができる。（多面的・総合的に考える力）」



１いつもできる　２ときどきならできる　３あまりできない　４できたことがない

（４）「自分の気持ちや考えをうまく人に伝えることができる。（コミュニケーションを行う力）」



１いつもできる　２ときどきならできる　３あまりできない　４できたことがない

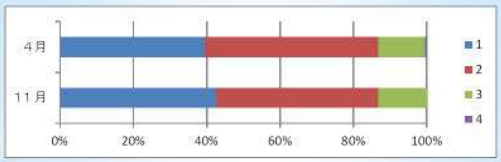
生徒の自由記述より

・小学校では一部の人の意見で物事を進めていたが，体育のダンスの授業では誰かが提案したものを全員で討論したり，全体の意見を聞いて計画を立てられるようになった。
・音楽，国語，社会といった様々な教科から「能」という一つのものを見る授業によって，色々な側面から考えることができるようになった。
・理科と技術のつながりを知ったことで，使いやすさと環境のつながりを考えることが少しでもできるようになった。

生徒の自由記述より

・数学の授業でグループ活動も多いため，自分の意見もしっかり言って班の中でコミュニケーションをとり，レポートなどを作成できた。
・今までは現在の情報だけで未来を予測していたりしていましたが，過去の出来事を理解した上で，未来の社会を予測したりできるようになった（特に社会の時間で身に付いた）。
・ＥＳＤをするまでは，環境問題などの情報を得ても，「そうなんだ」としか思わなかったけれど，ＥＳＤを深めるにつれて，「私には何ができるかな」ということや，「どうしたらこの問題は解決するのだろう」という思考が生まれるようになった。

（５）「人やもの，社会，自然などと自分とのつながりを大切にしようとしている。（つながりを尊重する態度）」



１いつもしようとしている　２ときどきしようとしている　３あまりしようとしていない
４しようとしたことがない

能力・態度の伸びの分析
・教科等を中心とした本校の実践では，
①～④の力はおおむね伸びているが，
⑥の態度は伸びていない。

①批判的に考える力
②未来像を予測して計画を立てる力
③多面的，総合的に考える力
④コミュニケーションを行う力
⑤他者と協力する態度
⑥つながりを尊重する態度
⑦進んで参加する態度

今年度は，能力・態度の「つながり」を
中心に研究を進めている。

今年度の本校教育研究発表会は

平成２８年１１月２３日（水・祝）

持続可能な社会の形成者として必要な資質・能力の育成
～生徒の深い学びとカリキュラムの開発を通して～

公開授業（８コマ×２）と能力・態度グループ別分科会
濱野　清　先生　のご講演

ご静聴ありがとうございました

ＡＣＴＩにおける
ＥＳＤの実践

～ハワイ姉妹校とのペンパルアクティビティを通して～

広島県立広島井口高等学校
指導教諭　永尾　和子

平成10年

平成12年

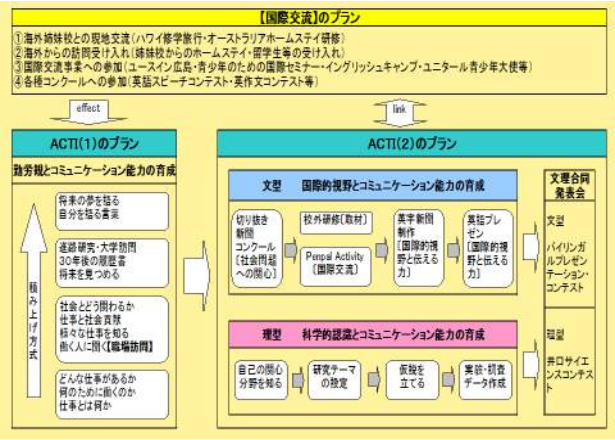
平成14年

平成20年

１年　　教師の体験を聞く ＋ 小論文

２年　　ハワイについての学習

３年　　「課題研究」という受験勉強



平成22年

ＡＣＴＩ（２）の改革

ハワイについての学習
座学・個別学習

↓

ハワイ修学旅行を活用した学習
活動・グループ学習

アクティブ
ラーニング

インフルエンザの大流行
ハワイ修学旅行中止

?

行けないからこそ交流を

↓

文通
（ペンパルアクティビティ）

ペンパル・アクティビティ

ハワイ姉妹校との継続的な文通

↓

修学旅行を中心とした充実した交流

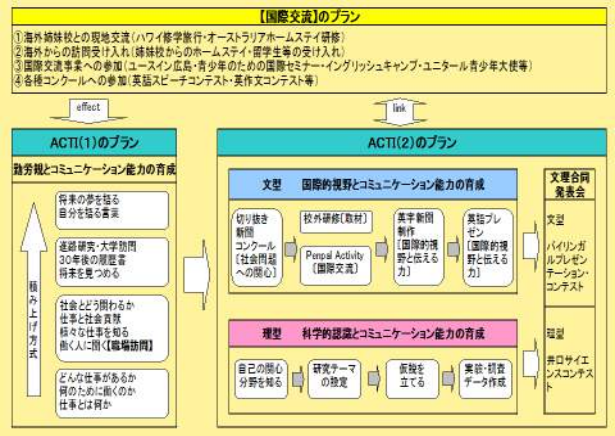
↓

互いの生活や文化の違いを知る学習

↓

国際理解の困難点を乗り越える意志

ESD


【国際交流】のプラン
①海外姉妹校との現地交流（ハワイ修学旅行・オーストラリアホームステイ研修）
②海外からの訪問受け入れ（姉妹校からのホームステイ・留学生等の受け入れ）
③国際交流事業への参加（ユースイン広島・青少年のための国際セミナー・イングリッシュキャンプ・ユニタール青少年大使等）
④各種コンクールへの参加（英語スピーチコンテスト・英作文コンテスト等）
effect
link
ACTI(1)のプラン
勤労観とコミュニケーション能力の育成
将来の夢を語る
自分を語る言葉
進路研究・大学訪問
30年後の履歴書
将来を見つめる
社会とどう関わるか
仕事と社会貢献
様々な仕事を知る
働く人に聞く【職場訪問】
どんな仕事があるか
何のために働くのか
仕事とは何か
積み上げ方式
ACTI(2)のプラン
文型　国際的視野とコミュニケーション能力の育成
切り抜き新聞コンクール【社会問題への関心】
校外研修（取材）
Penpal Activity（国際交流）
英字新聞制作【国際的視野と伝える力】
英語プレゼン【国際的視野と伝える力】
理型　科学的認識とコミュニケーション能力の育成
自己の関心分野を知る
研究テーマの設定
仮説を立てる
実験・調査データ作成
文理合同発表会
文型
バイリンガルプレゼンテーション・コンテスト
理型
井口サイエンスコンテスト

Merry Christmas
Mele Kalikimaka
わたし は げんき です。 I am nino.
あなた に ほんで に あえて よかった。 It was very nice meeting you.
わたし は にほん に いきたい です。 I would like to go to japan sometime.
あなた は かわいい です。 You are very cute, and pretty.
ライサ
メリークリスマス
HAPPY NEW YEAR
2013
あけまして おめでとう ございます
We exchange New Year's cards called nengajo on New Year's Day.
Last year went so fast
My new year's resolution is to study English very hard. How about you?
I look forward to your continued good will in the coming year!

JUNIORS

年間プログラム

Ⅰ期　**切り抜き新聞・校外研修**
～社会的視野の拡充

Ⅱ期　**ペンパルアクティビティ**
～姉妹校交流を通した国際理解

Ⅲ期　**英字新聞**
～グローバル社会における発信力

Ⅳ期　**バイリンガル・プレゼンテーション**
～パブリック・スピーキング

The Inokuchi Guardian

Friday, February 23, 2018

ONE FOR ALL, ALL FOR ONE

With Strength, Kindness, Decisiveness and Challenge, Step Forward Cheerfully and Sincerely

Brilliant New Slogan of Inokuchi Reflects Students' Attitude, Behaviors, and Determination

Great Gold Prize In a Long Travel

Aim at the Target!

Baton to Future

①中国新聞社の協力
ブランケット版新聞発行
印刷センター見学

②発行数2800部
オープンスクールで配布
各中学校等にも配布

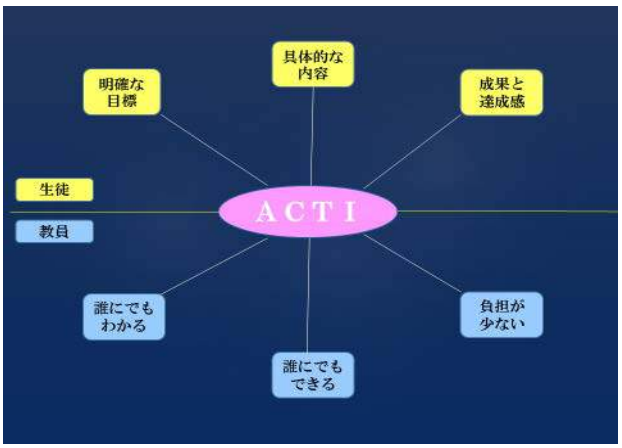
①中国新聞社の協力
ブランケット版新聞発行
印刷センター見学

②発行数2800部
オープンスクールで配布
各中学校等にも配布

切り抜き新聞で発見した課題について調べ学習

英字新聞・・・英語でまとめる・発信する

バイリンガルプレゼンテーション
・・・英語で話す・パブリックスピーキング



マイナス ⇨ プラス

課題解決につながる新たな価値観を創り出す意志

関係性を持続させたいという強い意志

状況を把握し多面的に考えようとする思考力

代替案を模索するための智恵と工夫

ESD

96

ご静聴ありがとうございました。

誰にでもわかる

誰にでもできる

プラン ⇨ システム

ESD

目標の明確化

系統的な年間計画

具体的プログラム